

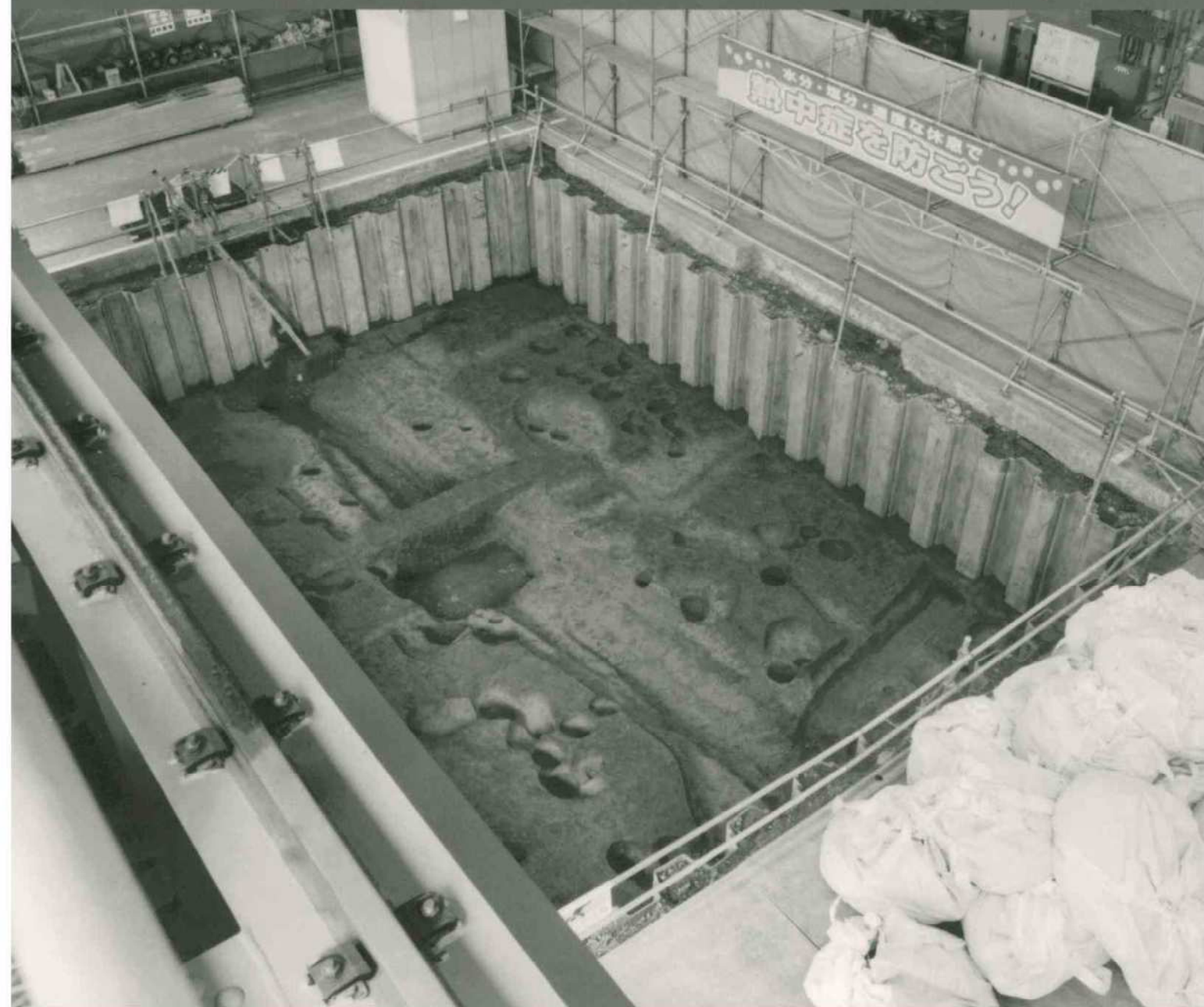
梶子遺跡 24

Kajiko Site The 24th
excavation report

浜松市教育委員会

2021 年 3 月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2021



梶子遺跡 24

2021 年 3 月

浜松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、静岡県浜松市中区南伊場町 33 番地の 1 ほかにおける梶子遺跡 24 次発掘調査の報告書である。なお、梶子遺跡における報告書名について、従前は調査次数を用いていたが、書名の付与方法の見直しにより、本報告書は梶子遺跡における 24 冊目の報告書にあたるため、『梶子遺跡 24』とした。
- 2 発掘調査は、東海旅客鉄道株式会社浜松工場の新幹線台車旋盤新設工事に先立ち実施した。現地発掘調査及び資料整理・報告書刊行作業は、東海旅客鉄道株式会社から依頼を受けた浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。調査にかかわる費用は、全額東海旅客鉄道株式会社が負担した。
- 3 発掘調査にかかわる面積と期間は以下の通りである。
調査面積 約 102 m²
調査期間 令和 2 年（2020 年）5 月 12 日～5 月 27 日
- 4 現地調査及び資料整理・報告書刊行作業は、井口智博（浜松市市民部文化財課）が実施し、和田達也・北澤志織・岡本佳枝（浜松市市民部文化財課）が補佐した。
- 5 本書の執筆及び写真撮影は井口が行った。
- 6 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡 例

- 1 方位は磁北、標高は海拔高である。
- 2 土層・土器の色調は新版『標準土色帖』（農林水産庁農林技術会議局監修）に準拠した。
- 3 遺構の略記号は以下の通りとし、遺構番号は、種別ごとに付した。
SK：土坑 SD：溝 SP：小穴 SE：井戸
- 4 本書に掲載された遺構図、遺物実測図の縮尺は、それぞれの図面に明記した。
- 5 本書で使用した弥生土器の形式名や用語及び編年観は、以下の文献に基づき記載した。
鈴木一有 2009「鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」
『鳥居松遺跡 5 次 弥生時代編』（財）浜松市文化振興財団

目 次

例 言・凡 例

第1章 序 論	1
1 調査に至る経緯	1
2 梶子遺跡をめぐる環境	2
3 梶子遺跡の調査履歴	5
第2章 調査成果	7
1 基本層位	7
2 検出遺構と遺物	8
第3章 総 括	21
1 発掘調査の成果	21
2 今後の展望と課題	23
出土遺物観察表	25
報告書抄録	

図 版

図 版 目 次

1	調査区全景（北東から）
2	1 調査区全景（北西から）
	2 調査区全景（西から）
3	1 SE01 完掘状況（北西から）
	2 SE02 完掘状況（北東から）
4	1 SD03 完掘状況（北から）
	2 SD04・05・06・07 完掘状況（北東から）
	3 調査区北西小穴完掘状況（北東から）
	4 調査区南東小穴完掘状況（西から）
5	主要出土遺物
6	SD01 出土遺物
7	SD01・02 出土遺物
8	SD03・SE02 出土遺物

挿 図 目 次

Fig.1	梶子遺跡の位置	1
Fig.2	梶子遺跡周辺の遺跡分布図	2
Fig.3	調査位置と周辺の調査区	6
Fig.4	土層柱状図	7
Fig.5	調査区全体図	9
Fig.6	SD01 実測図	11
Fig.7	SD01 出土遺物（1）	12
Fig.8	SD01 出土遺物（2）	13
Fig.9	SD01 出土遺物（3）	14
Fig.10	SD01 出土遺物（4）	15
Fig.11	SD01 出土遺物（5）	16
Fig.12	SD02～04 出土遺物	17
Fig.13	SE01・02 実測図	18
Fig.14	SE01・02 出土遺物	19
Fig.15	SP37・包含層出土遺物	20
Fig.16	伊場遺跡群における装飾高杯の諸例	22

表 目 次

Tab.1	梶子遺跡における発掘調査一覧	5
-------	----------------	---

第1章 序 論

1 調査に至る経緯

梶子遺跡は、伊場遺跡群を構成する遺跡の一つである。遺跡の範囲は、ほぼ東海旅客鉄道株式会社浜松工場の敷地と重なっており、過去には国鉄工場内遺跡と呼ばれていた。

遺跡は1962年に旧国鉄浜松工場内の工事現場から出土した弥生土器片が、浜松市郷土博物館に持ち込まれたことにより、存在が明らかになった。梶子遺跡とその周辺は大正時代から厚く盛土がなされており、当初は遺跡の規模や性格について把握することが困難であったが、1970年代後半以降、浜松工場の建物新築等により本格的な発掘調査が行われるようになった。

梶子遺跡では、これまでに浜松工場の施設建設に関連する調査のほか、周辺の開発等に伴う発掘調査が行われ、徐々に遺跡の性格が明らかになりつつある。過去の発掘調査の結果から、弥生時代に東西1km近くにも及ぶ広大な居住域をもつ集落であったことや、飛鳥・奈良・平安時代の木簡や墨書土器などの古代文字資料が多数出土し、隣接する伊場遺跡とともに当地に古代敷智郡の郡家が存在したことが明らかになっている。

浜松工場は、東海道新幹線の定期検査場として基幹的な役割を担ってきたが、工場の老朽化とその耐震性の強化が課題となっていた。このため工場の全面的な建替と改修が計画され、工事に先立ち2011年度から2017年度にかけて本発掘調査を実施した。工場建替に伴う本発掘調査は2018年度末に報告書を刊行し事業を完了した。

浜松工場の建替及び改修に伴う発掘調査は2018年度で完了し、工場施設の稼働が開始されたが、2019年に工場内において、新型車両導入に伴う新たな車両点検設備が必要となり、既存の工場建屋内の機器設置工事が計画された。計画地は梶子遺跡の弥生時代後期集落の範囲内に位置しており、当該部分の埋蔵文化財の取り扱いを協議した結果、埋蔵文化財の保護がはかれない部分について、本発掘調査を実施することになった。

現地発掘調査及び整理・報告作業は、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が実施した。調査面積は約102 m²である。

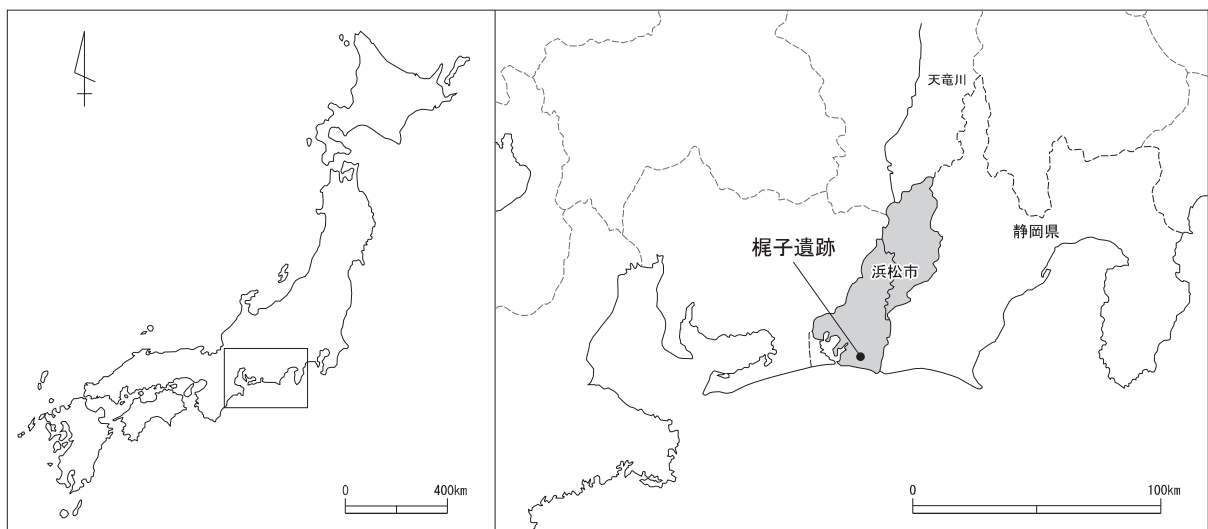


Fig.1 梶子遺跡の位置

2 梶子遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

梶子遺跡は、浜松市南部の海岸平野上に位置しており、平野内には海岸線に沿って東西方向に広がる6列の浜堤列が確認されている。最も内陸側の第1浜堤列は、約8,000年～7,000年前に形成された三方ヶ原台地南端の海蝕崖直下の砂州である。第2・3浜堤列は、海岸線の後退とともに約5,000年前には形成されたと推定されている。以後も海岸線の後退が続き、第4～6浜堤列が形成された。浜堤列間には低地が存在し、天竜川やその支流の氾濫平野となっていたことから、沼地等の湿地が形成され、粘質土や植物遺体を含む有機質土等の低湿地堆積物が堆積している。これらの浜堤列は平野の東寄りの天竜川沿いでは6列を数えるが、西側の浜名湖畔では3列に収束される。

梶子遺跡は伊場遺跡群に属し、遺跡群のほぼ中央に位置する。遺跡群の北側には、第1浜堤列上に中村遺跡、梶子北遺跡、三永遺跡が立地し、南側の第2浜堤列と氾濫平野上には城山遺跡、伊場遺跡、九反田遺跡、鳥居松遺跡、畷東遺跡が立地する。梶子遺跡が立地する第1・2浜堤列間の低地は、東の天竜川より運ばれた大量の土砂が流入した氾濫平野と、西に向かって標高を下げ現在の堀留川へと続く後背低地の境となっている。氾濫平野内には、土砂の堆積と自然堤防为天竜川からの水流が減少したことにより形成された微高地が存在する。梶子遺跡では、弥生時代中期後半から後期の遺構が確認され、低地と微高地上での土地利用に明確な違いがみられることが今までの調査で判明している。微高地上の居住域は環濠により周囲を区画され、遺構の密度が高いのに対して環濠の外に広がる低地では遺構は希薄である。古墳時代以降になると洪水による粘土層が厚く堆積し、低地と微高地に広がる生活域を埋没させたと考えられる。古墳時代後期以降、居住可能な地盤が形成され、奈良・平安時代には古代敷智郡の郡家が設置されるが、中世以降は湿地化及び水田化したとみられ、積極的な土地利用の痕跡は認められなくなる。当遺跡の立地は、生活環境が自然環境の変化に大きく左右されていたと言える。

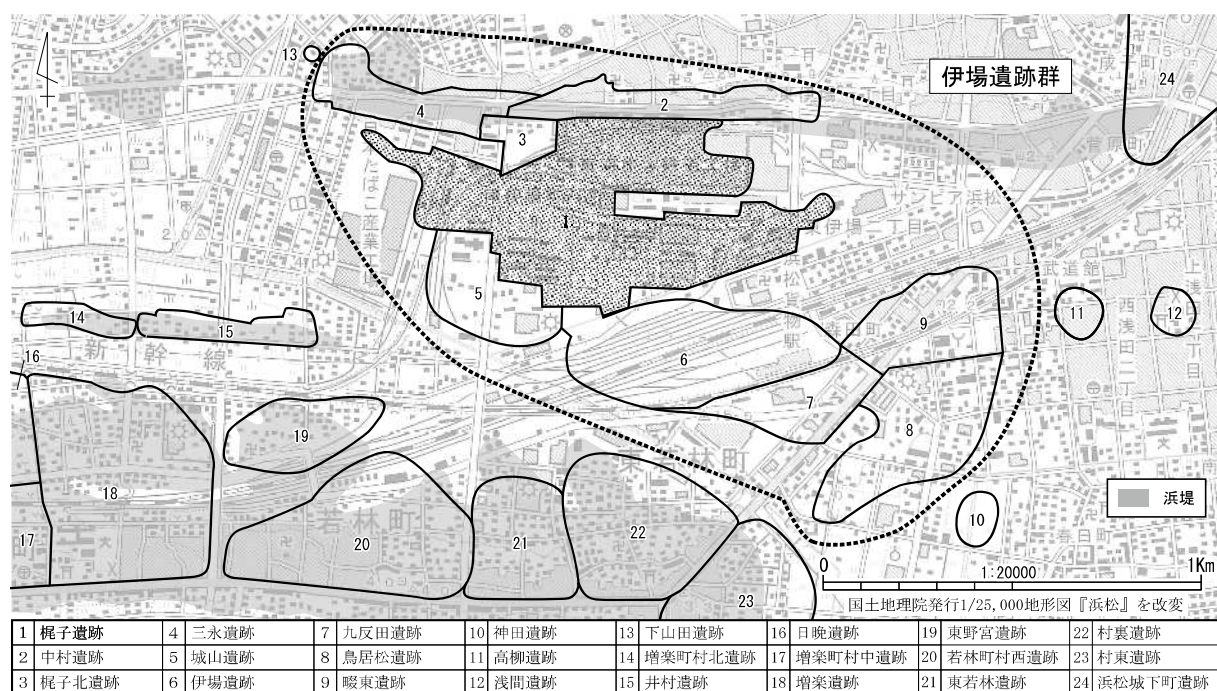


Fig.2 梶子遺跡周辺の遺跡分布図

（２）歴史的環境

縄文時代 縄文海進時、海岸平野の殆どは海面下であったと考えられるが、安定した浜堤列が形成された場所では局所的に遺跡が確認される。梶子遺跡周辺の浜堤列上では、梶子北遺跡と中村遺跡において前期末から中期初頭の焼成遺構と考えられる礫群が確認された。また、城山遺跡では前期末～中期前半の、高塚遺跡では中期の遺物が出土している。中期から晩期にかけての集落遺跡の多くは、蜷塚遺跡に代表されるように三方ヶ原台地上で確認されている。

弥生時代 弥生時代になると天竜川沿いに発達した平野において遺跡の出現をみるようになり、特に中期以降遺跡数が大きく増加する。伊場遺跡群においては、第１浜堤列上の梶子北遺跡や中村遺跡、三永遺跡で東西 800 m に及ぶ範囲に多数の方形周溝墓が検出されるなど中期の墓域の広がり確認されている。梶子遺跡や梶子北遺跡からは、環濠と考えられる溝や多量の木製品等が出土しており、中期後葉には定住的な生産活動が開始されたことを示している。浜名湖畔でも、舞阪町天白遺跡、亀ヶ原遺跡、白石山遺跡、大山Ⅰ遺跡や弁天島湖底遺跡などが確認される。

後期になると梶子遺跡や伊場遺跡内の微高地上において、周囲に長大な環濠を有する大規模な集落が営まれるようになり、集落の周囲の浜堤列間低地においては水田耕作が行われた痕跡が確認される。後期前半は遺構と遺物が高密度に分布しており、伊場遺跡群が最も範囲を広げた時期とみられる。後期後半に入ると、伊場遺跡、梶子遺跡周辺では遺構と遺物が希薄となり、遺跡群の東側に位置する鳥居松遺跡において新たな環濠集落が形成される。天竜川平野においても集落の縮小や廃絶が確認され、これらの土地利用の変化は、自然環境の変化に起因するものであると考えられる。

古墳時代 古墳時代前期には、梶子遺跡のほか梶子北遺跡と隣接する下山田遺跡などで遺構と遺物が確認されるが、分布は散見的であり集落としての範囲的な広がり認められない。これは、弥生時代後期後半からの自然環境の悪条件が継続し、定住・生産活動が困難であったためと考えられる。また、伊場遺跡群の周辺においては、前期の古墳の存在も確認されていない。

古墳時代中期になると、佐鳴湖の北側台地には狐塚古墳、妙法塚古墳が、南側には直径 44 m、高さ 59 m の大型円墳である入野古墳が築造される。伊場遺跡群内の第１浜堤列上に位置する三永遺跡、中村遺跡と浜堤列間低地に位置する梶子遺跡、城山遺跡、伊場遺跡では竪穴建物をもつ集落が営まれるようになる。この時期に伊場遺跡群を貫流する伊場大溝が形成されたと考えられる。これらの遺跡群の集落は、古墳時代後期にかけても継続し、城山遺跡では掘立柱建物と竪穴建物を複数検出している。伊場遺跡群南側の第３浜堤列上には、東若林遺跡等で集落が形成され、居住域の広がりが確認できるようになる。同様に浜名湖東岸でも亀ヶ原遺跡、大山Ⅰ遺跡が確認され、古墳時代中期から後期にかけての集落増加の過程を窺うことができる。古墳は佐鳴湖周辺に蜷塚古墳群、根川山古墳群、第４浜堤列の東端に田尻古墳群が確認できるが、伊場遺跡群を含めた平野上に展開した集落の規模と比較して小規模な古墳の分布に留まる。浜名湖東岸の根本山の山頂から山麓には、根本山古墳群や深萩古墳群などの群集墳が分布しており、これらを平野部に営まれた集落の居住者の墓域とする見解も存在する。

奈良・平安時代 律令体制における国郡里制の実施で天竜川以西の地域には、遠江国の敷智郡、引佐郡、浜名郡、龜玉郡、長田郡（長上郡、長下郡に分割。のち長上郡に統合）が置かれるようになる。過去の調査から、敷智郡家は伊場遺跡群、引佐郡家は井通遺跡、浜名郡家は吉美遺跡群、長上郡家は宮竹野際遺跡を包括する永田遺跡群内に存在したと推定されている。奈良時代になると低地の第３浜堤列上の若林町村西遺跡、高塚遺跡、八王遺跡、高塚町村西遺跡、高塚町村東遺跡、

第4浜堤列上の小沢渡町村中遺跡、小沢渡町村中東遺跡、新橋町村中遺跡、浜名湖東岸の大山Ⅱ遺跡や北浦遺跡などの遺跡で遺構と遺物が確認される。

伊場遺跡群においては、敷智郡家の中核となる官衙関連施設と関わる遺構や遺物が数多く出土している。遺物では伊場遺跡群の北西から南東へ流れる伊場大溝から、木簡や墨書土器などの文字資料が多数出土し、その内容は年号、行政関連文書、地名、人名、吉祥文字、祭祀系文字と多岐に渡る。紀年銘木簡も複数出土しており、梶子遺跡から出土した「己卯年」と記された木簡は西暦679年を示すと考えられる伊場遺跡群中で最も古い木簡で、飛鳥時代後期には既に渚評（敷智郡）に関連する施設が存在したことを示している。

敷智郡家の中核施設について、奈良時代は具体的な建物跡の検出には至っていないものの、木簡や墨書土器のほか、帯金具、唐三彩陶枕などの優れた遺物が出土したことから城山遺跡周辺が有力視されている。平安時代においては、梶子北遺跡で9世紀代のL字形に配置された大型の掘立柱建物群が検出されており、政庁又は館とみられることから、この付近に中核施設が存在したと推定されている。

郡家に関わる官職名を表すものとして、梶子北遺跡から郡家の長官を示す「大領」と記された木簡が出土したほか、伊場遺跡や梶子遺跡から「少領」、「主政」、「主帳」、と記された木簡や墨書土器が出土しており、郡家における四等官名が出土遺物から確認できる。また、布を納めたとみられる複数の人名とともに重さが記されたものや、人名と米の量が記されたものなど租税に関する木簡も出土しており、地方官衙における実態を解明するうえで伊場遺跡群出土の古代文字資料は重要視されている。奈良・平安時代の古代文字資料は、遺跡群の東端から西端まで幅広く分布しており、当時の敷智郡家に関連する施設が広範囲にわたって営まれていたことが窺える。

当該期の駅路である古代東海道は当地域において、断定できる遺構は確認されていない。ただし、伊場遺跡群からは、栗原駅を示す「栗原」と書かれた木簡や、「栗」「栗原駅長」と記された墨書土器など、駅伝制に関連する遺物が出土している。水運としては、伊場遺跡で出土した木簡に「浜津」の文字が認められ、湊としての津の存在を示している。鳥居松遺跡では杭と横木で作られたテラス状の空間に、栈橋や階段を設けた護岸工事の例も確認されており、潟湖の港湾施設があったことが窺える。

中世以降 平安時代中期になると各地に荘園が形成され、浜松では浜松庄（荘）池田荘、都田御厨、美園御厨、羽鳥荘、市野荘、蒲御厨、川匂荘、村櫛荘、刑部御厨、浜名神戸、尾名御厨、長上荘、長下荘などの荘園が成立していった。その頃の集落は、第3浜堤列上や第4浜堤列上に多くみられるほか、西鴨江地区や佐鳴湖西岸地区の台地上に当該期の集落跡が確認される。

当該期の伊場遺跡群は浜松荘域に含まれると推定されている。この浜松荘は、当時天竜川本流であった現在の馬込川左岸を東端として、西は浜松市西区雄踏町に至る広大な範囲に広がっていたと推定される。第1浜堤列上の三永遺跡、梶子北遺跡、中村遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物や井戸が確認されているが、遺跡群全体では遺構と遺物が希薄となる。土層堆積状況から中世以降においては広範囲で湿地化した痕跡が確認でき、平安海進期の海水準の上下変動による環境変化に起因するものとみられる。また、城山遺跡と梶子遺跡に跨がる範囲において戦国期に掘削された幅5～7m程の大型区画溝を確認しており、居館の周囲に巡らされた堀であると推定されている。堀全域からは漆塗の木製品、内耳鍋や陶器、かわらけ等が多数出土しているが、居館としての建物跡は確認されていない。この堀の廃絶後には積極的な土地利用の痕跡は確認されておらず、水田等の生産活動的な土地利用にとどまる。

3 梶子遺跡の調査履歴

梶子遺跡は、伊場遺跡群を構成する遺跡の一つであり、北側を中村遺跡、梶子北遺跡、三永遺跡、西側を城山遺跡、南側を伊場遺跡と接している。過去には各々が個別の遺跡として認識されていたが、発掘調査の進展により遺構と遺物の展開状況から相互の密接な関係が明らかとなり、9箇所の遺跡が広がる東西約2.3 km、南北約1.2 kmの範囲を伊場遺跡群と総称している。

梶子遺跡の発見は、浜松工場内の工事現場から出土した弥生土器が、浜松市博物館に持ち込まれたことが契機となった。1976年には、工場の施設建設に伴い最初の発掘調査が実施され、以後工場の増改築や周辺の開発に伴う調査が継続して実施されている。

これまでの発掘調査により、縄文時代から中世に至る幅広い時期の遺構と遺物が検出されているが、特に弥生時代後期と奈良・平安時代の成果において特筆すべきものがある。

弥生時代後期においては、後期前半に形成された東西約550 m、南北100 mに及ぶ環濠集落を確認しており、伊場遺跡の三重環濠の集落と同時期に集落域が広がっていたことが明らかになっている。今回の調査区の近傍においては、掘立柱建物跡が集中して検出されており、遺物の出土量も極めて多いことから、集落の中心域と推定される。

奈良・平安時代においては、伊場大溝と呼ばれる自然流路が検出されており、遺跡内を北西方向から南東方向に貫き、伊場遺跡へと続いている。大溝内からは、木簡や墨書土器などの古代文字資料が多数出土しており、その内容から古代における敷智郡の郡家が遺跡内に存在したと考えられ、当該期の地方官衙を考察するうえで多くの情報が得られている。

Tab.1 梶子遺跡における発掘調査一覧

遺跡調査名	調査期間	調査面積	調査主体	主な時代	報告書	発行年
梶子1次	1976.12	40㎡	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査略報（非公式刊行物）	1976
梶子2次	1977.1～1977.5	200㎡	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査略報Ⅱ	1977.6
梶子3次	1978.2～1978.3	288㎡	浜松市教育委員会	弥生・古墳	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ	1978.3
梶子4次	1978.12～1979.2	520㎡	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ	1979.9
梶子5次	1979.10～1979.12	360㎡	浜松市遺跡調査会	弥生	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ	1980.1
梶子6次	1982.5～1982.12	1747㎡	浜松市遺跡調査会	弥生～平安	国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報	1983.5
梶子7次	1982.10～1983.3	1401㎡	浜松市遺跡調査会	弥生～平安	国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報	1983.12
梶子1983	1983.11～1984.2	233㎡	浜松市遺跡調査会	弥生	梶子遺跡調査概要	1984.3
梶子8次	1990.8～1990.12	2493㎡	（財）浜松市文化協会	弥生・奈良	梶子遺跡Ⅷ	1991.12
梶子9次	1992.7～1992.12	2000㎡	（財）浜松市文化協会	弥生～平安・戦国	梶子遺跡Ⅸ	1994.3
	1993.3～1993.4	40㎡	浜松市教育委員会		梶子遺跡Ⅸ付録	1994.5
梶子1994	1994.12～1995.1	31㎡	浜松市教育委員会	弥生～奈良	梶子遺跡（その2）	1997.5
梶子10次	2001.1～2002.8	2252㎡	（財）浜松市文化協会	弥生～平安	梶子遺跡Ⅹ	2004.2
梶子11次	2008.6～2008.11	1195㎡	（財）浜松市文化振興財団	弥生～戦国	梶子遺跡11次	2010.3
梶子12次	2008.5	188㎡	（財）浜松市文化振興財団	弥生～鎌倉	梶子遺跡12次	2008.9
梶子13次	2010.5～2010.11	1606㎡	（財）浜松市文化振興財団	弥生～戦国	梶子遺跡13次	2012.3
梶子14次	2011.6～2012.3	1871㎡	浜松市教育委員会	弥生～戦国	梶子遺跡14次	2013.3
梶子15次	2012.4～2013.3	4399㎡	浜松市教育委員会	弥生～戦国	梶子遺跡15次	2014.3
梶子16次	2013.4～2014.3	4754㎡	浜松市教育委員会	縄文～近世	梶子遺跡16次	2015.3
梶子17次	2014.4～2015.3	2016㎡	浜松市教育委員会	弥生～中世	梶子遺跡17次	2016.3
梶子18次	2015.4～2016.4	1656㎡	浜松市教育委員会	弥生～中世	梶子遺跡18次	2017.3
梶子19次	2016.3～2017.7	6573㎡	浜松市教育委員会	弥生～平安	梶子遺跡19・20次	2019.3
梶子20次	2017.10～2018.1	70㎡	浜松市教育委員会	平安～中世	梶子遺跡19・20次	2019.3
梶子21次	2014.10～2015.1	498㎡	浜松市教育委員会	弥生・奈良・平安	梶子遺跡21次	2015.3
梶子22次	2016.6～2016.11	2600㎡	浜松市教育委員会	弥生～鎌倉	平成28年度浜松市文化財調査報告	2018.3
梶子23次	2018.12～2019.3	890㎡	浜松市教育委員会	弥生～戦国	梶子遺跡23次	2020.3
梶子24次	2020.5	102㎡	浜松市教育委員会	弥生	本報告書：梶子遺跡24	2021.3

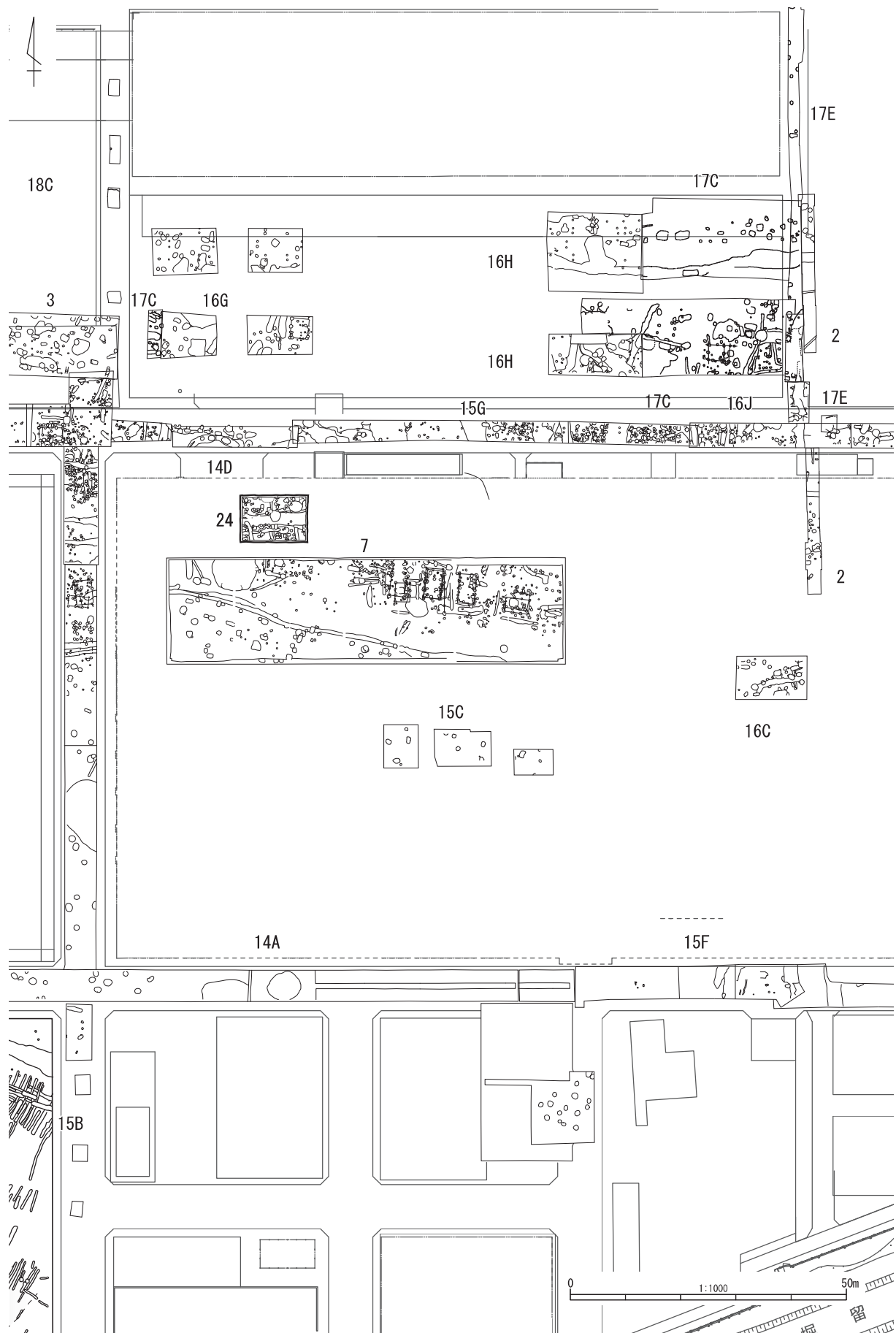


Fig.3 調査位置と周辺の調査区

第2章 調査成果

1 基本層位

今回の調査区は、第1浜堤列と第2浜堤列の間に形成された浜堤列間低地と砂質堆積物に形成された微高地に位置する。梶子遺跡の北側は第1浜堤列上に立地しており、砂丘砂層を基盤とした地形に遺構が展開しているが、浜堤列の南側は浜堤列間低地に形成された自然流路である梶子北大溝が東西方向に広がっている。梶子北大溝以南は、部分的に微高地が広がり、伊場遺跡と接した遺跡南側は低地となっているなど、調査地点によって地下の地形の様相が大きく異なる。

調査区内の表層は、工場施設のコンクリートで覆われており、現地表面から約1.9mの深さまでは、黄褐色の山土により盛土されていた。この盛土は、現在の工場敷地を造成するために遺跡北方の三方原台地端などから運搬されて来たものである。

盛土の下には、埋立造成前の表土である緑灰色粘土の堆積を確認し、その下には弥生時代の遺物を多量に含む黒灰色粘土が堆積していた。この黒灰色粘土の堆積は、色調などの特徴や遺物の時期から弥生時代の遺物包含層である伊場D層に相当する層位と考えられる。

遺物包含層の下には、未分解の植物片を多く含む黒色有機質粘土層が堆積しており、調査区南側においては、より分解が進んだ黒色粘土層が確認できた。基盤層は青灰色微砂層であり、その下層は灰色砂の砂丘砂層となっており、掘削がここまで到達すると湧水がみられた。

近傍の調査地点においては、表土である緑灰色粘土層の下で、古代の遺物包含層である暗灰色粘土層（伊場B層相当）と古墳時代の遺物を少量包含する青灰色粘土層（伊場C層相当）の堆積を確認しているが、今回の調査区内においては、これらの層位は確認できなかった。今回の調査地点は遺跡内の微高地上に立地しており、周辺の低地と比較して高まりとなっていることから、古墳時代以降の包含層は、後世の耕作等により削平され、消失したと考えられる。

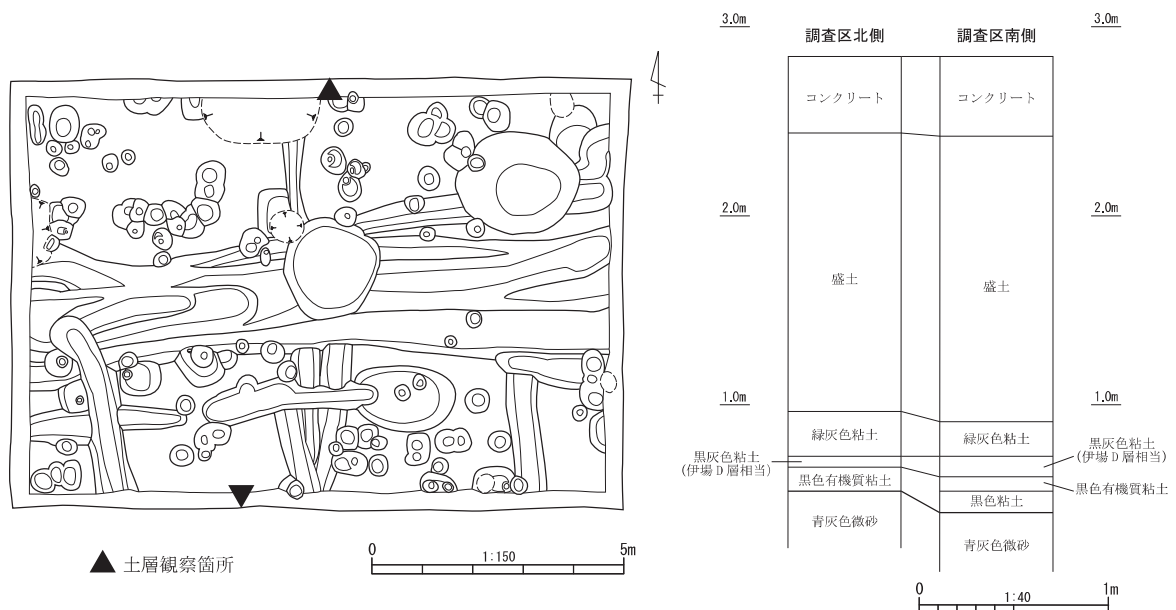


Fig.4 土層柱状図

2 検出遺構と遺物

(1) 概 要

今回の調査区は、梶子遺跡 7 次調査区と 14・15 次調査区に挟まれた場所に位置する。これらの近傍の調査区では、弥生時代後期の集落に関連した遺構が検出されており、南側に隣接する 7 次調査においては、集落の外周に掘削された環濠と複数の掘立柱建物が検出され、多量の弥生土器とともに銅鐸片が出土した。14・15 次調査区においても、環濠とみられる溝や複数の掘立柱建物を検出し、多数の弥生土器が出土した。

今回の調査においては、弥生時代の遺物包含層である黒灰色粘土層を除去し、無遺物層である黒色有機質粘土層の上面で遺構検出を行った。検出面の標高は、0.6 ～ 0.7 m であり高低差は僅かであったが、調査区南側と比較して、北側がやや高くなっていた。遺構検出の結果、溝を 14 条、井戸を 2 基、土坑を 4 基、小穴を 97 基検出した。調査区の面積は約 102 m² であるが、遺構密度は高く、遺物の出土量も多かった。

調査区中央では、東西方向に掘削された比較的規模の大きな溝である SD01 を検出した。その他の溝は SD01 と比較して規模は小さく、掘削方向が一致するか SD01 に対して直交する方向に掘削されていた。SD01 は埋没したのちに再度掘削された痕跡が確認できたほか、検出された他の溝も掘削時期に若干の差異が認められたものの、集落内の区画など相互に関係性をもって掘削されたものと推定される。

調査区内の全域において、多数の小穴が検出された。小穴は深く掘削されており、配置から明確な建物跡として見出せるものはなかったが、掘立柱建物の柱穴とみられ、複数の建物が存在したと推定される。また、調査区内からは 2 基の井戸が検出された。建物群の周囲に配置され水源として利用されたと考えられる。

遺物は、弥生時代の遺物が主体であり、特に溝からの出土品が多く認められた。土器は弥生時代後期前半の山中式期の特徴を示しており、壺や高坏、鉢や甕などの器種が大多数を占めるが、装飾高坏や実用的な用途とは異なる小型の土器が含まれており、出土状況から祭祀に関連する遺物と推定される。

遺構の性格や出土品などから、過去に調査された周辺の調査区と同様に、今回の調査区も当該期の集落内に位置すると考えられる。

(2) 溝

溝は 14 条を検出した。調査区中央において検出した SD01 が最も規模が大きく、その他は幅が 1 m 未満の小規模な溝であった。溝の掘削方向は、調査区に並行するように東西方向に掘削されたものと、直交するように南北方向に掘削されたものが認められた。

今回検出した溝の中では、SD01 が他の溝と比較して規模や遺物の出土量が突出しており、これまでに梶子遺跡内で検出した弥生時代後期の環濠に匹敵する規模のものである。また、その他の溝も SD01 に対して並行または直交するように掘削されていることから、相互に関係性を持っているとみられ、SD01 を基軸に集落内を区画した溝である可能性が高いと考えられる。

遺物は、弥生土器が主体であり、特に SD01 からは下層を中心に多数の土器が出土した。溝の埋没の過程で投棄されたものと考えられる。

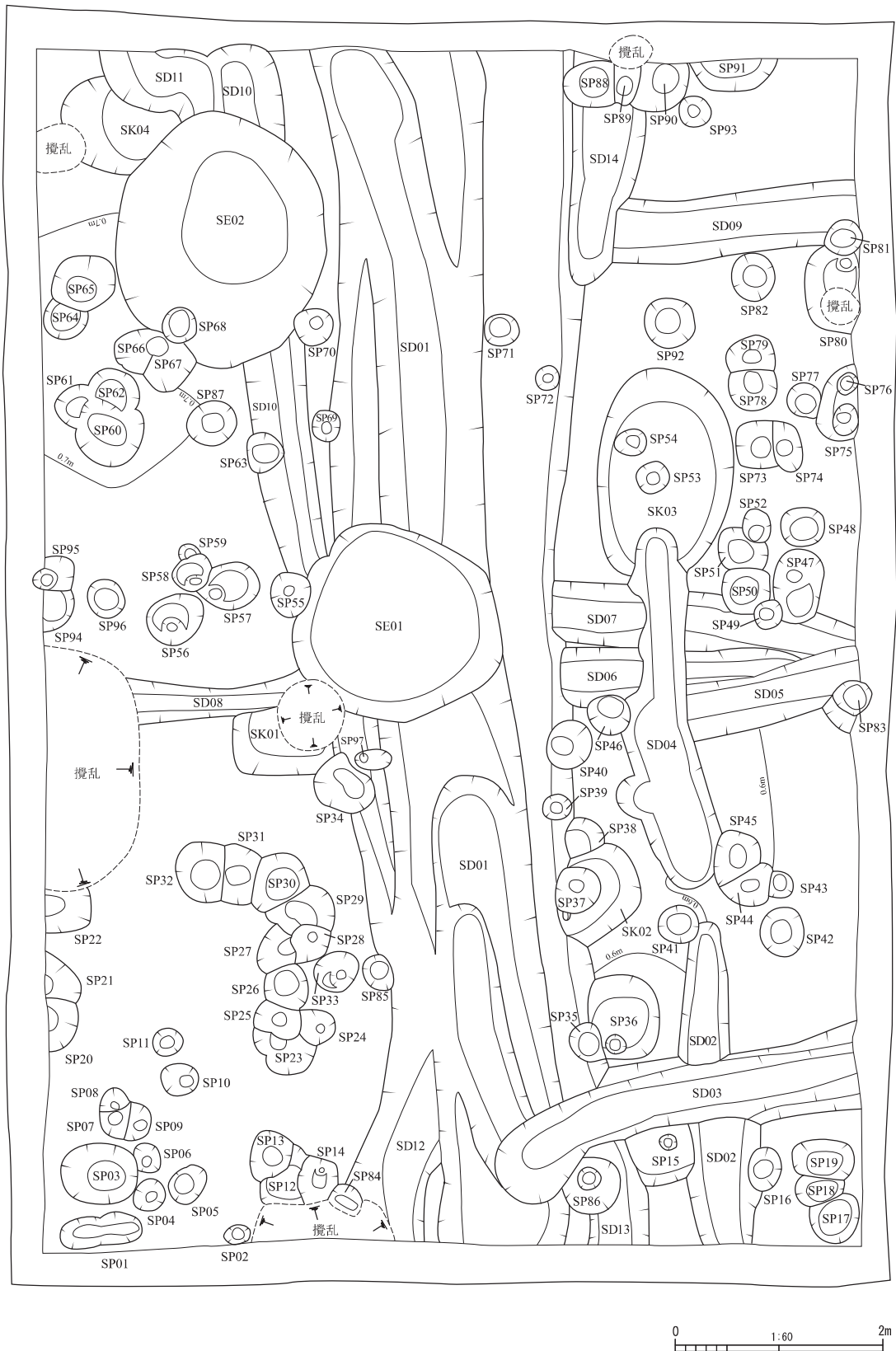


Fig.5 調査区全体図

SD01 (Fig.6 ~ 11) 調査区の中央を東西方向に掘削された最大幅 2.7 m、深さ 0.5 ~ 0.8 m の溝である。並行して SD10 や SD12 ~ 14 など複数の溝が掘削されており、SE や SP など多数重複するため、本来の形状が把握し難いが、両岸にテラス状に段をもち、中央が深くなる構造であったと考えられる。

溝はほぼ直線的に掘削されているが、底面の形状は複雑で西端が浅いのに対し、東側は深い形状となっていた。特に SD03 との重複箇所及び SE01 以東が深く、上層はテラス状に浅く幅広に掘削されているが、中途から幅が狭くなり、深く掘削されていた。

土層断面の観察結果から、溝は緩やかに埋没していったと考えられるが、SE01 以東については、埋没したのち、再度掘削された痕跡が確認された。埋土には炭化物が多量に含まれており、溝の底面に近い位置からは、炭化物に混じって多数の弥生土器等の遺物が出土した。特に溝の東半の下層において遺物の出土量が多く、埋没初期の段階において炭化物とともに投棄されたと推定される。

1 ~ 58 は SD01 の出土品である。弥生土器を中心に多数の遺物が出土し、壺や高坏、甕、鉢などは後期前半の山中式期の特徴を示すものが多く認められる。また、一部に天竜川以東からの搬入またはその影響を受けたと考えられる個体も存在する。

1 ~ 15 は壺である。1 ~ 9 は壺の口縁で、複数の形態が認められる。1 と 2 は外反口縁壺、3 ~ 5 は内湾口縁壺、6 と 7 は折返口縁壺、8 と 9 は菊川式の広口壺の口縁である。1 の口縁端部には刺突文が施されている。2 の口縁端部には 2 本 1 組の浮文が貼り付けられており、口縁内面に波状文が施されている。5 の肩部には楕状工具による横線文と波状文が交互に施されている。6 は口縁端部に刺突文が、7 の口縁内面には波状文が認められる。8 と 9 は菊川式の広口壺の口縁であり、ともに端部の外面には 5 本 1 組の棒状文が貼り付けられている。また、8 の口縁内面には扇形文が、9 の口縁内外面には縄文が施されている。いずれも胎土の特徴が他の土器と異なることから、天竜川以東からの搬入品と考えられる。10 は小型壺である。11 は直口壺である。外面に文様は認められず、縦方向のミガキ調整が施されている。12 ~ 15 は壺の体部である。13 の肩部には横線文と波状文が施されている。

16 ~ 27 は鉢である。16 は装飾小型直口鉢の口縁で、外面には羽状の刺突文が施されている。17 ~ 24 はく字鉢である。23 には口縁端部に近い位置に 2 箇所の穿孔が認められる。24 は口縁が直線的な形状で、体部も球形に近く、他の個体とは特徴が異なる。25 は装飾く字大型鉢である。体部の外面はハケ調整ののち荒くミガキ調整され、口縁の外面には羽状の刺突文が施されている。26 は片口鉢である。内外面ともに縦方向のミガキ調整が施されている。27 は片口部分が確認できないが、形状から脚付片口鉢と考えられる。

28 ~ 44 は高坏である。坏部に複数の形態が認められるほか、菊川式ないしその影響を受けたと考えられる個体も含まれている。28 はワイングラス形高坏の坏部である。29 と 30 は小型の高坏の脚部である。31 ~ 34 は外反坏部高坏である。31 は坏部の外面に波状文が施されており、脚部には 3 箇所のスカシ穴と外面に 4 段の横線文が認められる。32 ~ 34 は坏部のみの破片で、32 は外面に横線文と波状文が認められるが、33 と 34 の外面には文様は認められない。35 は碗形坏部高坏である。脚部には 3 箇所のスカシ穴が認められ、3 段の横線文が認められる。36 ~ 40 は脚部である。41 は坏部、脚部ともに他の高坏とは形状が異なる個体である。外面には文様は認められず、脚端部は外反せず直線的な形状である。42 と 43 は菊川式の高坏である。胎土の特徴から天竜川以東から搬入されたものと考えられる。44 は装飾高坏の脚部である。脚部には楕円形のスカシ穴が 4 箇所入れられている。鍰状の突帯の上面には羽状に刺突文が施されている。

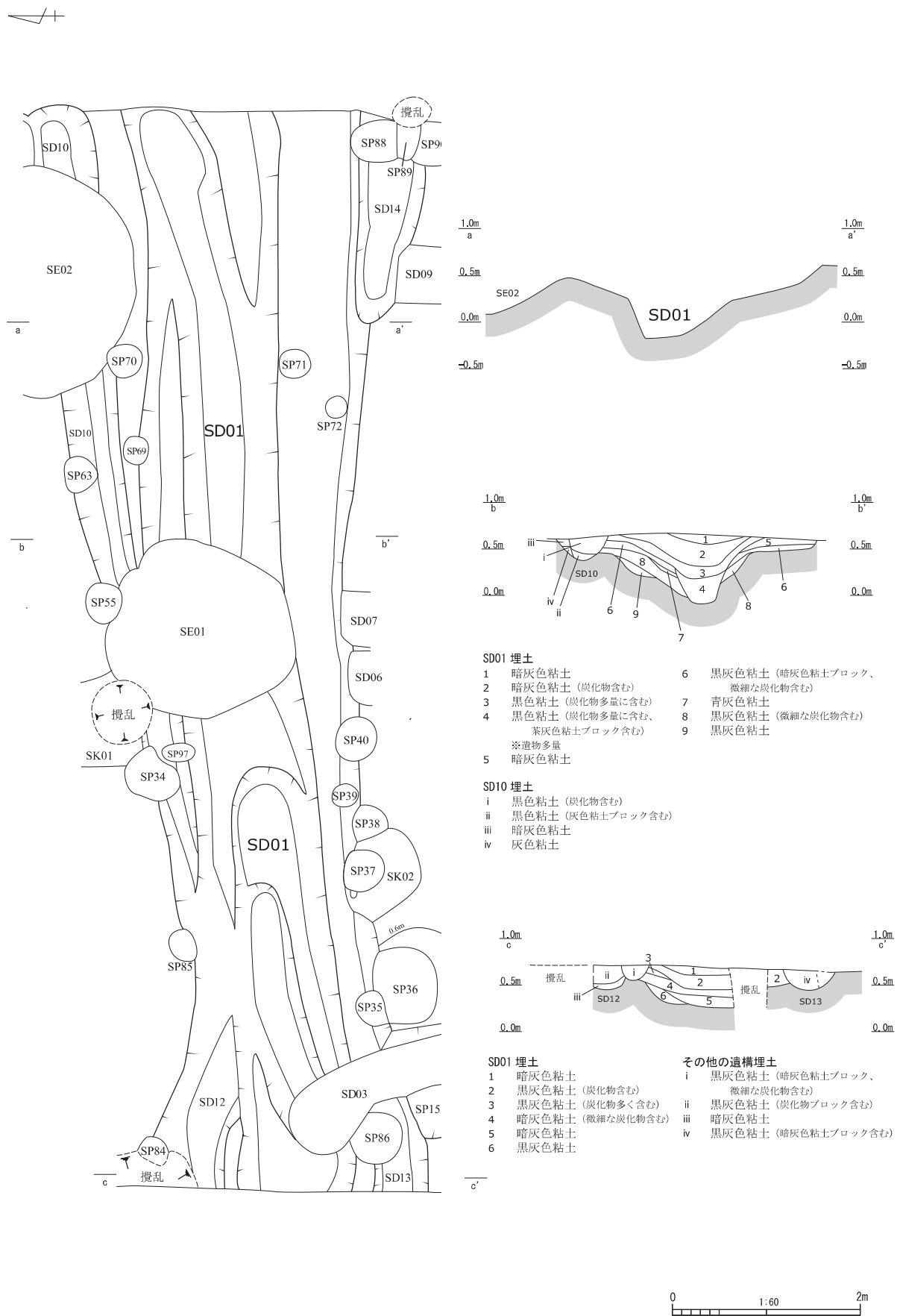


Fig.6 SD01 実測図

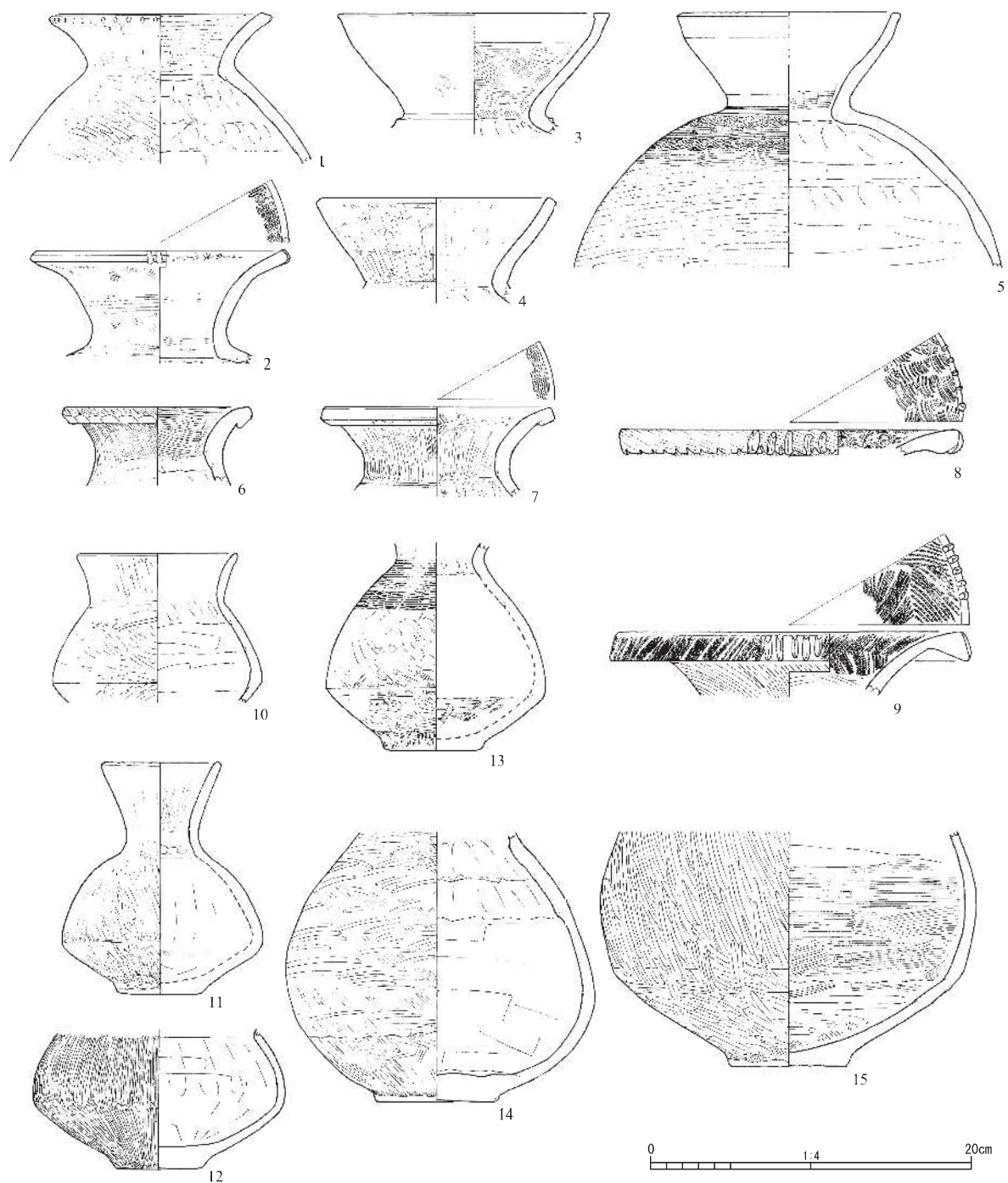


Fig.7 SD01 出土遺物 (1)

45～57はく字甕である。いずれも口縁端部には刺突文が施されており、無刺突の個体は認められない。また、口縁はヨコナデ調整されている個体と無調整の個体が存在するほか、内外面の調整についても両面ともハケ調整が施されたものと、内面にナデ調整が施されたものが混在している。外形については、45のみ肩部が張らない形状であるが、46～56はいずれも口縁より肩部が張り出した形態である。57はく字大型甕である。内外面ともにハケ調整され、口縁端部には刺突文が施されている。51のみ脚台部との接合部が確認できるが、他はいずれも脚台部が接合部から失われているため、粘土帯の有無については明確にできない。

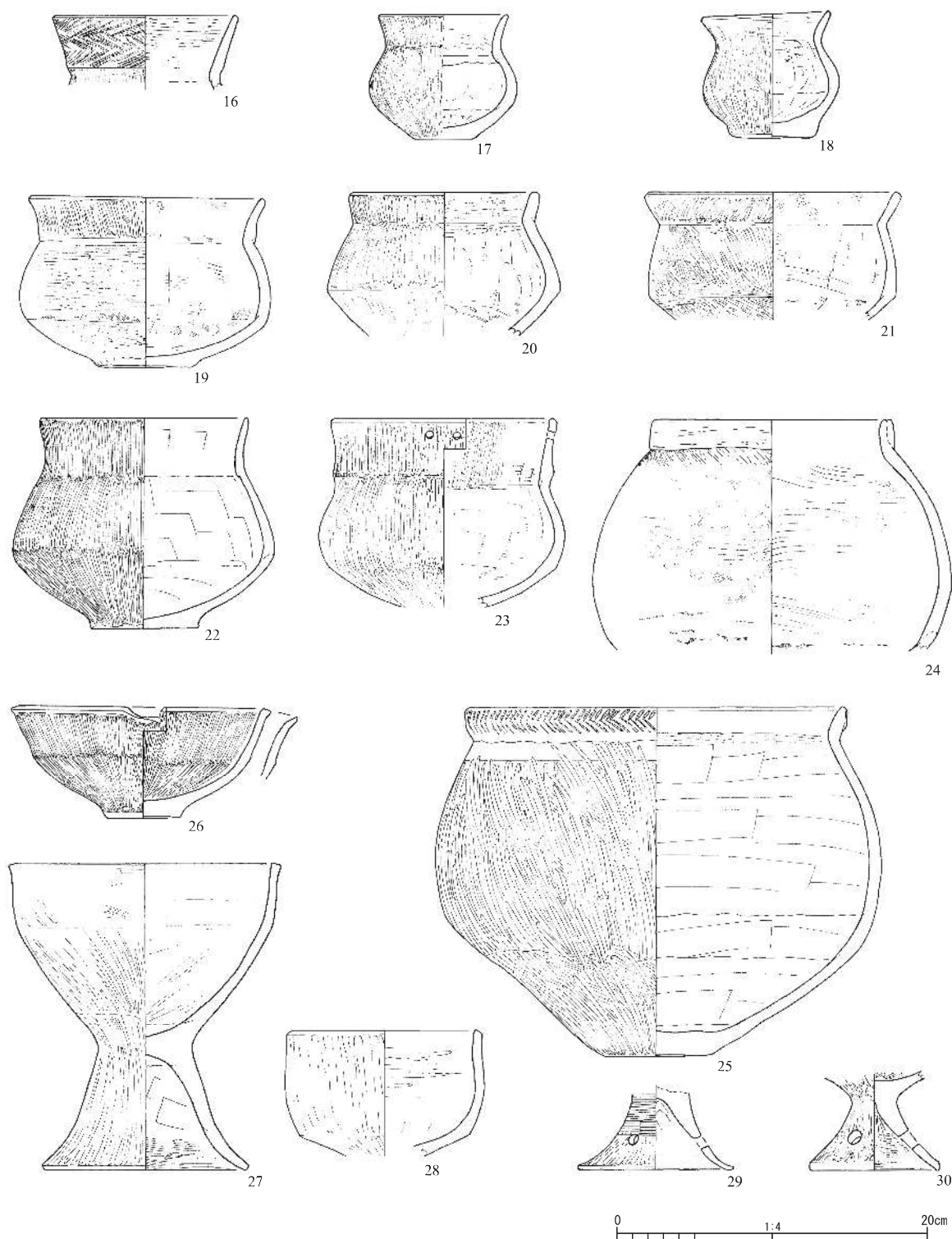


Fig.8 SD01 出土遺物 (2)

58は緑色片岩製の石器である。表面の剥落が著しく一部を欠損しているが、全体が研磨されており、端部は山形に成形されている。下部が欠損しているため、全体形は明確ではない。磨製石斧の可能性が考えられるが、刃部の有無が確認できないことや、全体的に薄手の形状であることから、断定できない。

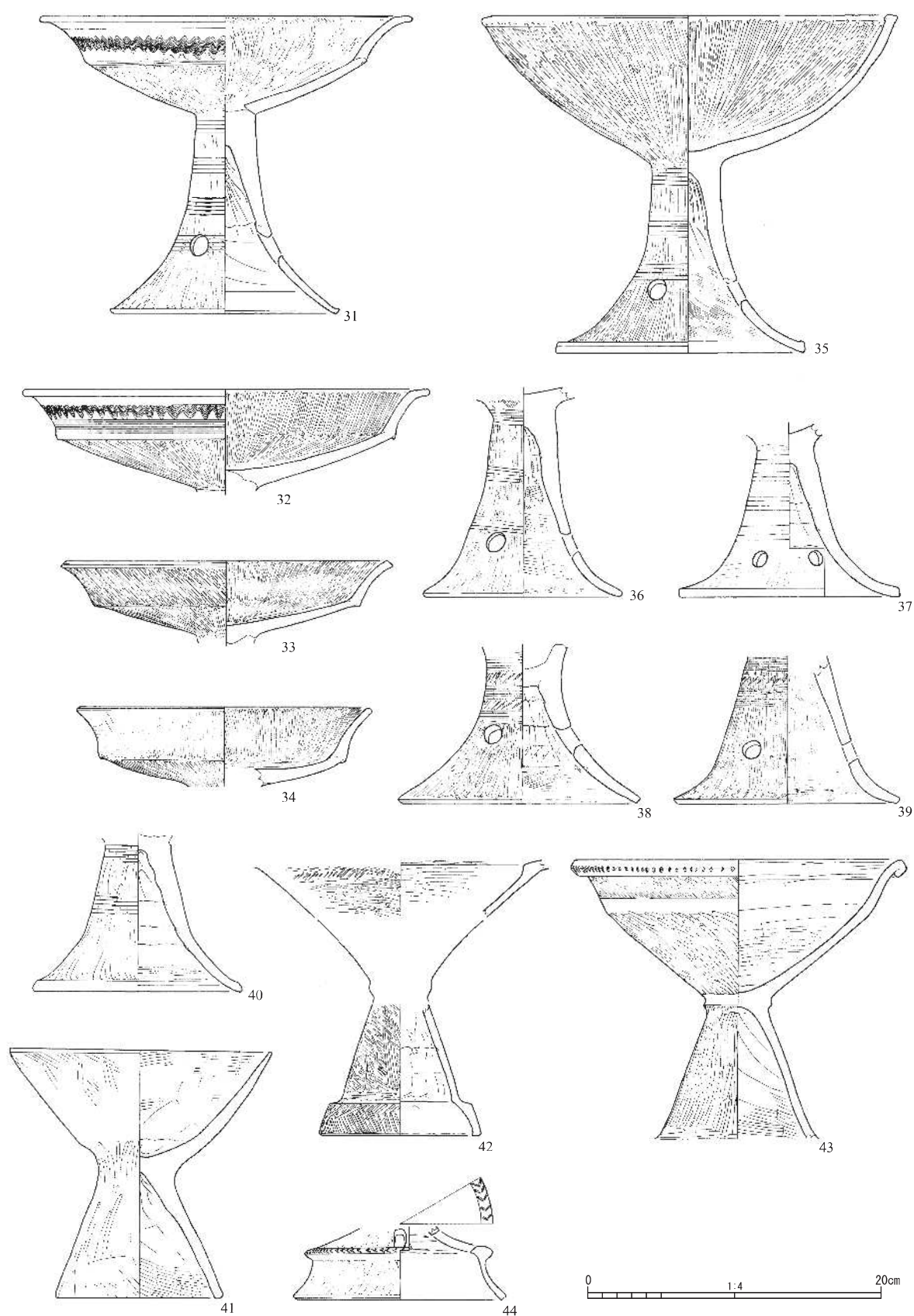


Fig.9 SD01 出土遺物 (3)

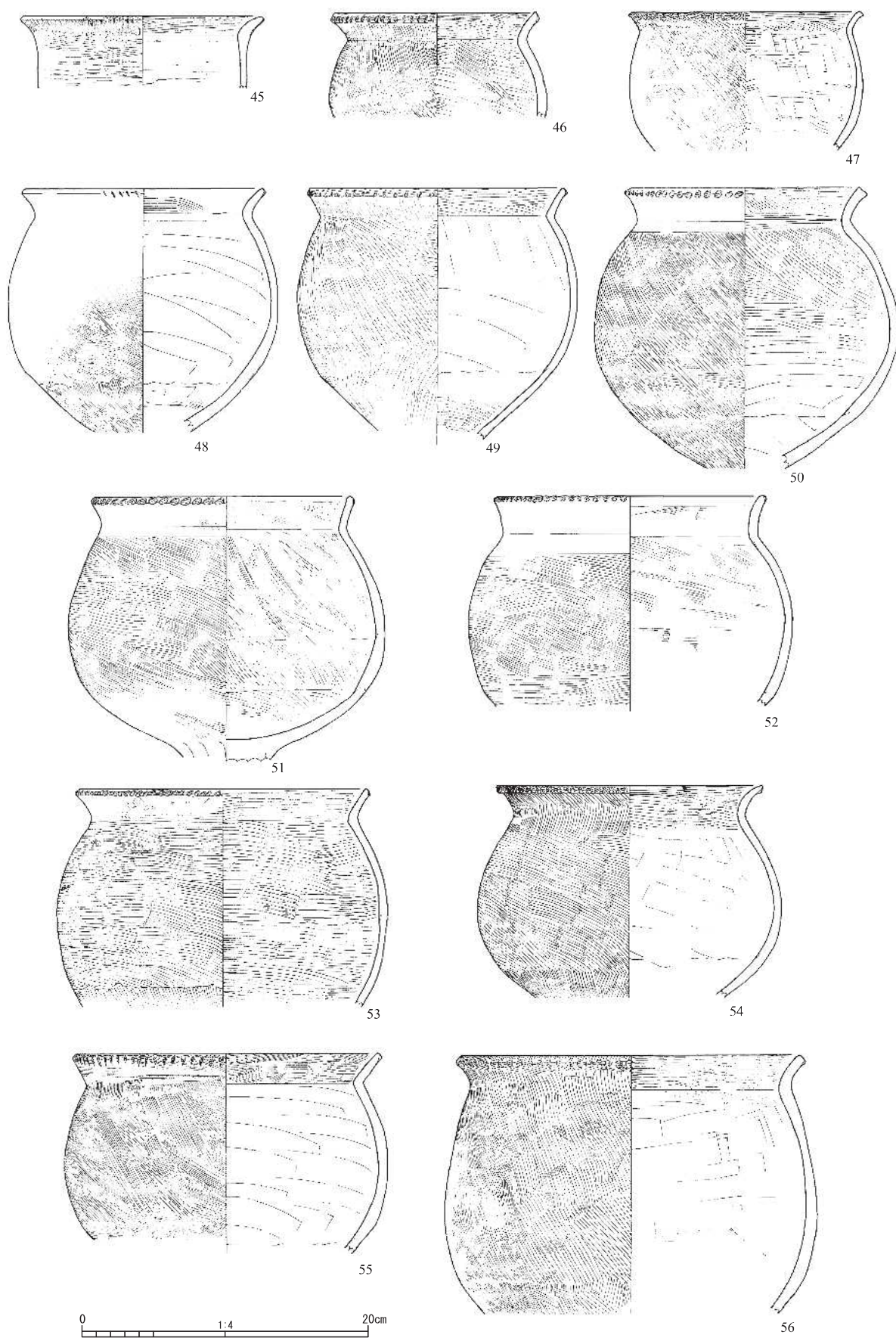


Fig.10 SD01 出土遺物 (4)

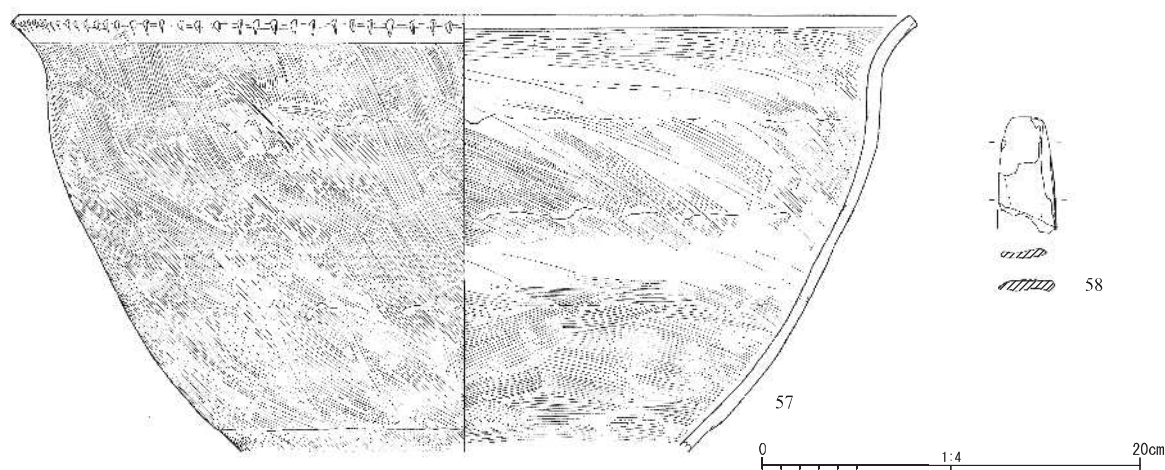


Fig.11 SD01 出土遺物 (5)

SD02 (Fig.12) 調査区南西で検出した最大幅 0.7 m、深さ 0.2 m の溝である。検出した延長は 3.1 m であるが、西側は調査区外へ続いている。SD01 とほぼ同じ東西方向に掘削され、中間は SD03 と重複している。

遺物は 59 ～ 61 の弥生土器が出土した。59 は小型壺である。口縁は外反した形状で、外面はミガキ調整が施されている。60 は高杯の脚部である。3 方向のスカシ穴が認められ、スカシ穴の直上には羽状刺突文が施されている。61 はく字碗形坏部高杯の坏部である。外面に文様は認められず、内外面ともにミガキ調整が施されている。

SD03 (Fig.12) 調査区南西で検出した幅 0.7 m、深さ 0.4 m の溝である。北側は SD01 と重複し、南側は調査区外へと続いている。SD01 と接している北側に向かって深く掘削されており、北端付近からは弥生土器の破片が集中的に出土した。

遺物は北端付近から弥生土器が比較的多く出土したが、破片が多く図示できたのは 62 のみであった。62 は碗形坏部高杯である。口縁端部に端面をもち、脚部の外反は弱く、外面に文様やスカシ穴は認められない。

SD04 (Fig.12) 調査区中央南側で検出した全長 3.5 m、幅 0.7 m、深さ 0.2 m の溝である。東端は SK03 と重複し、中間は SD05 ～ 07 が直交するように重複している。SD02 の延長方向に掘削されており、同一の溝であった可能性が考えられる。

遺物は弥生土器が出土し、63 を図示した。63 は装飾小型直口鉢である。口縁外面には羽状に刺突文が施される。

SD05 ～ 08 調査区中央で検出した溝である。いずれも幅 0.5 ～ 0.6 m 程度の溝で南北方向に掘削されている。SD05 ～ 07 は SD01 の南側に掘削されており、互いに重複しながら調査区外へと続いている。SD08 は SD01、SE01 を挟んで SD06 の延長方向に掘削されており、同一の溝であった可能性が高い。

いずれの溝からも弥生土器が出土したが、破片が多く図示できるものはなかった。

SD09 調査区南東において検出した幅 0.6 m、深 0.2 m の溝である。北側は SD14 と重複し、南側は調査区外へと続いている。遺物は弥生土器が出土したが、図示できるものはなかった。

SD10 ～ 14 SD01 の周囲に重複して掘削された溝である。いずれも幅 0.5 ～ 0.7 m 程度の溝で SD01 と同様に東西方向に掘削されている。遺物は弥生土器が出土したが、図示できるものはなかった。

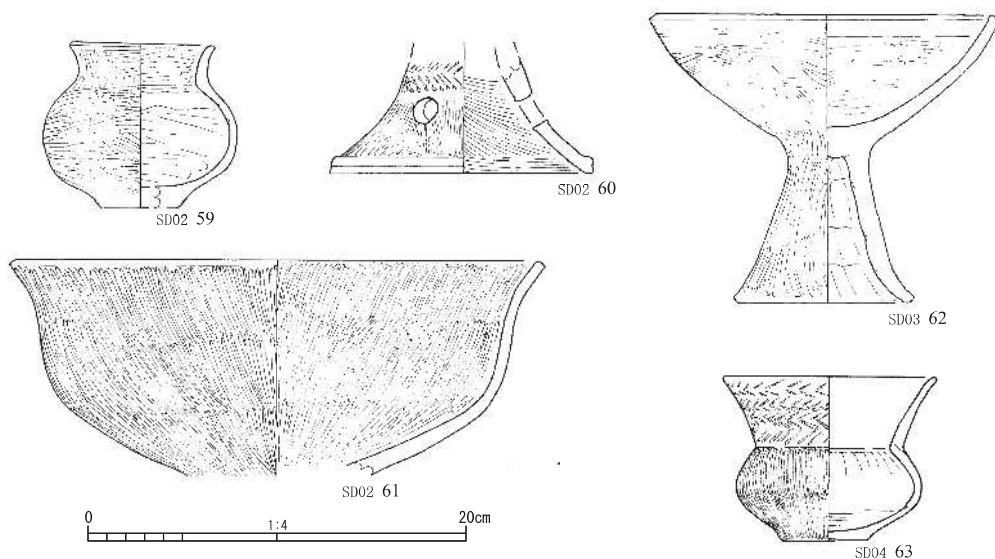


Fig.12 SD02 ～ 04 出土遺物

(3) 井戸

井戸は2基を検出した。いずれも素掘りの井戸で井戸側は確認できなかった。湧水層である砂丘砂層まで掘削されており、調査時においても湧水が認められた。集落内において水源として活用されたものと推定される。また、SE02 からは小型模倣品や装飾高坏などの特殊な形状の土器が出土しており、井戸に関わる祭祀の痕跡と考えられる。

SE01 (Fig.13・14) 調査区のほぼ中央で検出した長軸 2.0 m、短軸 1.9 m、深さ 0.8 m の井戸である。形状はほぼ真円に近い円形を呈し、大部分が SD01、SD10 と重複する。土層堆積状況から SD01 や SD10 より先行する遺構と考えられる。構造は素掘りで井戸側は認められず、底面は湧水層である砂丘砂層まで掘削され、調査時においても激しい湧水がみられた。

出土遺物は弥生土器と木製品で、64 ～ 66 を図示した。64 はワイングラス形高坏で、脚端部を欠損しているが、3 方向の円形のスカシ穴と外面に横線文が認められる。65 はく字甕の口縁部片である。口縁はやや直立した形状で、端部には刺突文が認められるほか、肩部との間にも刺突文が施されている。66 は木製品である。広葉樹を加工したもので腐食による欠損が著しいが、形状から鋤先と考えられる。

SE02 (Fig.13・14) 調査区の北東で検出した、長軸 2.5 m、短軸 2.0 m、深さ 0.8 m の井戸である。平面形は楕円形を呈し、SD01 と SD10・11、SK04 と重複している。構造は SE01 と同様に素掘りで井戸側は認められず、底面は湧水層である砂丘砂層まで掘削され、調査時には湧水がみられた。埋土中のほぼ全面から弥生土器が出土したが、底面に近い位置からまとまって出土する特徴が認められた。

出土した遺物を 67 ～ 76 に図示した。67 と 68 は小型壺である。いずれも口縁を欠損している。67 は器径が 6cm ほどの小型品であり、壺の小型模倣品と考えられる。69 は壺の体部である。口縁は欠損しているため形態は不明である。体部の外面はミガキ調整され、文様帯には横線文と 3 段の波状文が施されている。70 と 71 は小型直口鉢である。70 は口縁体部ともに縦方向のミガキ調整が施されている。71 の口縁部はヨコナデ調整され、体部は縦方向のミガキ調整が施されている。70 の器径は 6.8cm であり、実用的な用途の土器とは捉え難い形状である。

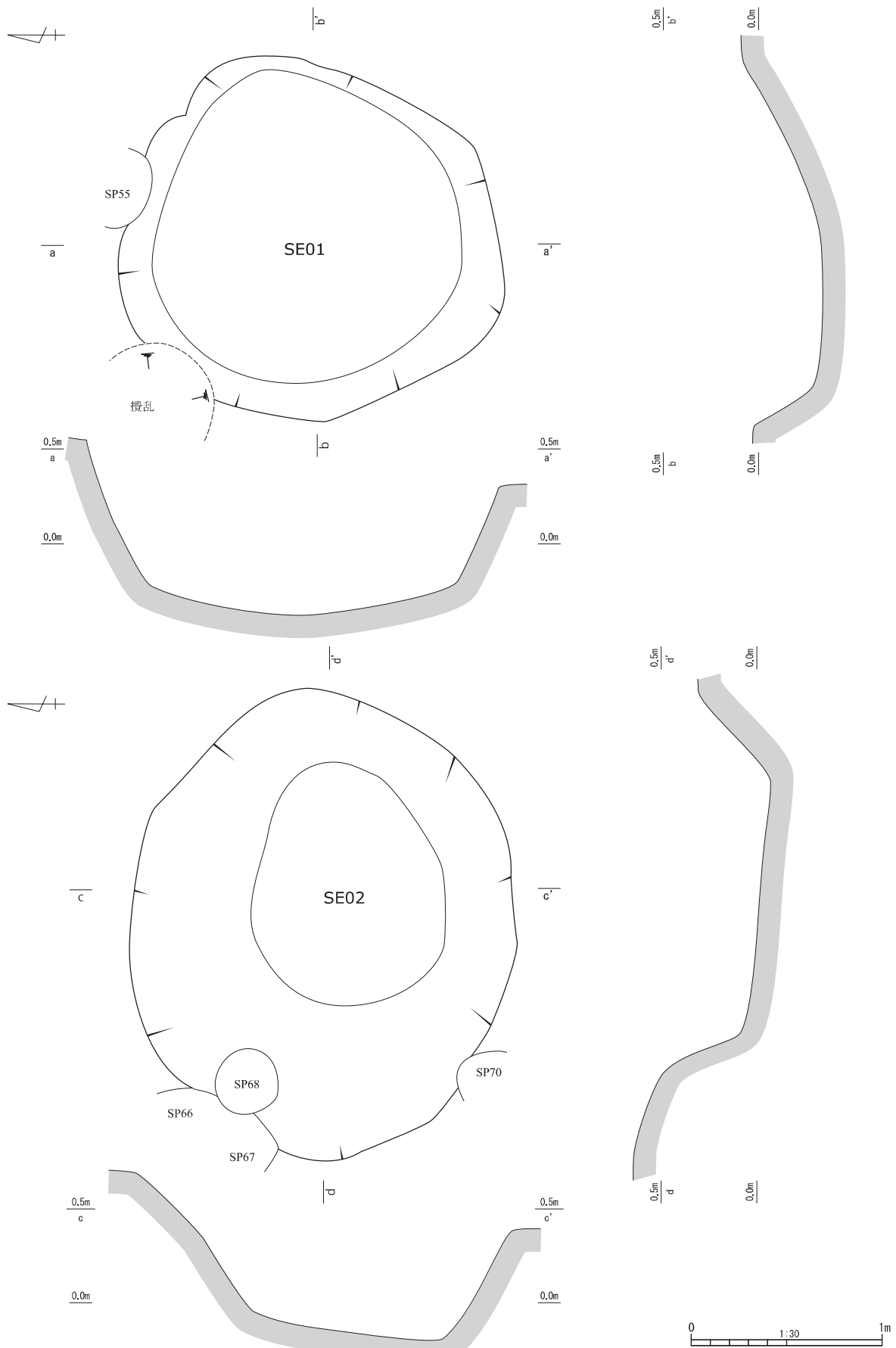


Fig.13 SE01・02 実測図

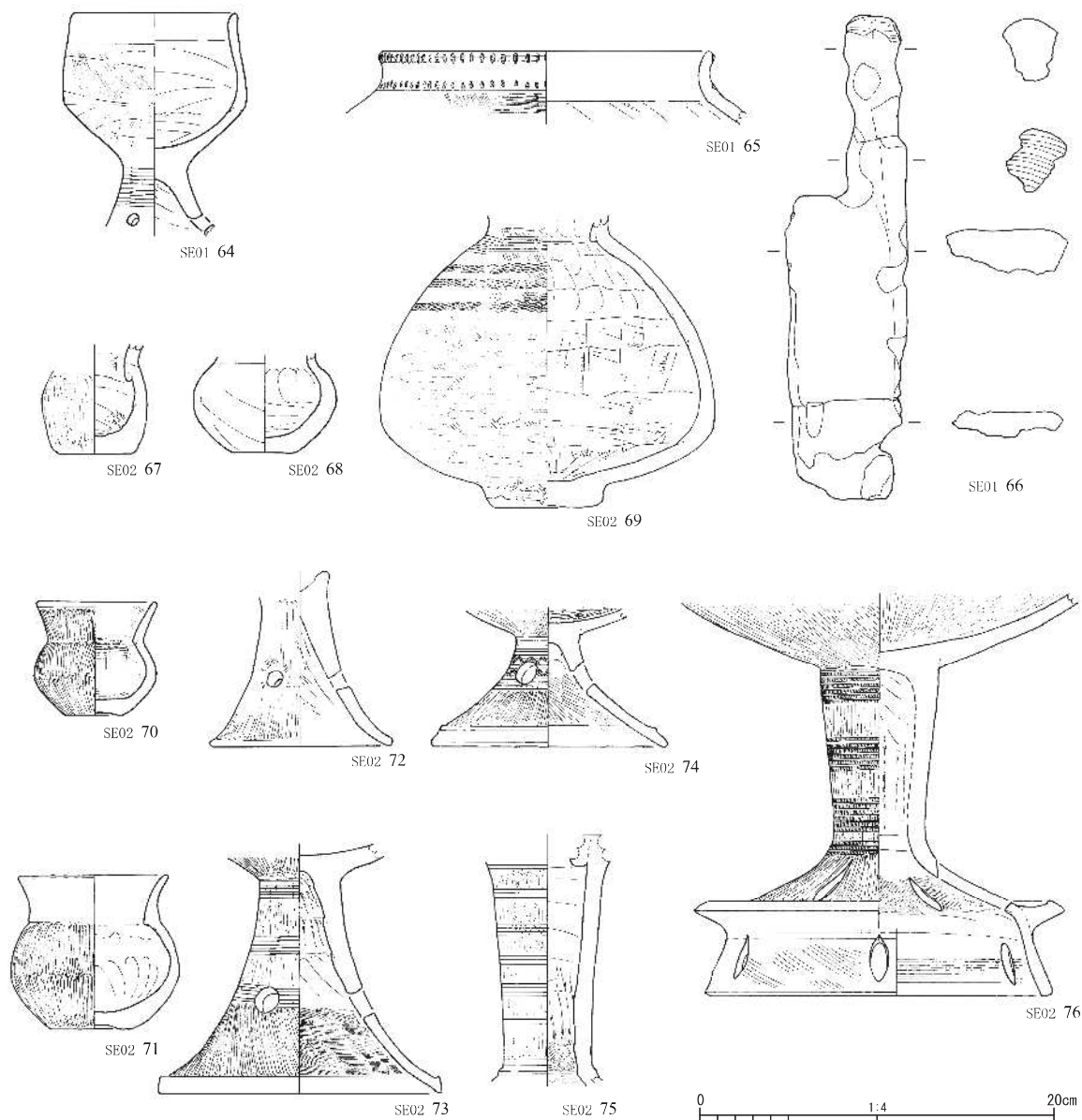


Fig.14 SE01・02 出土遺物

72～74は高坏の脚部である。いずれも円形のスカシ穴が3方向に入れている。72の外表面には施文は認められず、縦方向のミガキ調整が施されている。73の外表面は縦方向のミガキ調整が施されたのちに横線文が3段に施されている。74は他と比較して脚部が短い形状であることから、ワイングラス形高坏の脚部と推定される。外表面には横線文と山形の刺突文が交互に配されている。75と76は装飾高坏である。75は脚部のみの破片で、坏部と脚部の下半は欠損している。脚部は下方に向かって絞られた形状で、外表面にはミガキ調整ののちに横線文が6段に施されている。76は坏部の先端が欠損しているが、突帯を配した脚部は良好に残存している。脚部には突帯を挟んで凸レンズ形のスカシ穴が交互に5箇所入れている。また、脚部の外表面はミガキ調整されたのちに押圧横線文が4段に施されている。

小型壺や装飾高坏は底面に近い位置から出土しており、これらの特殊な形状の土器は、井戸の祭祀に関連して投棄されたものと推定される。

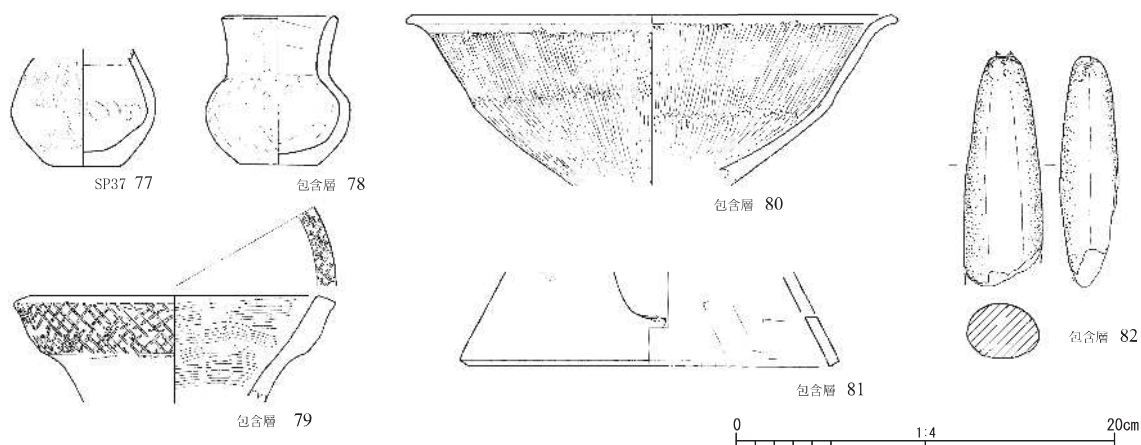


Fig.15 SP37・包含層出土遺物

(4) その他の遺構と遺物

土坑 土坑は4基を検出した。SK01は調査区中央北寄りで検出した土坑である。東側がSD08と南側がSD10と重複していたため、全体形を明確にできなかったが、隅丸方形の土坑と考えられる。SK02はSD01の南側に接して検出した土坑である。SD01のほかSP37・38とも重複していたため、全体形は明確ではないが、隅丸方形の土坑と考えられる。SK03は調査区南東寄りで検出した楕円形の土坑である。西側がSD04と重複しているが、長軸2.0m、短軸1.3mの規模である。SK04は、調査区北東端で検出した土坑である。SD11、SE02と重複していたため、全体形は明確ではないが、楕円形の土坑と考えられる。

いずれの土坑も弥生土器が出土したが、破片のため図示できたものはなかった。

小穴 (Fig.15) 小穴は97基を検出した。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は0.4～0.6m程度のものが多い。検出面からの深さは個々に異なるが、0.4～0.5mの深さまで掘削されたものが認められ、形状や出土遺物などから弥生時代後期の掘立柱建物の柱穴と考えられる。隣接する7次調査区においては、環濠に沿って複数の掘立柱建物跡が検出され、今回の調査区においても同様の建物群が展開していたと推定されるが、調査範囲が限られるため、明確に建物跡として見出せるものはなかった。

小穴からの出土品は少なく、弥生土器が出土したが、図示できたのはSP37から出土した77のみであった。77は小型壺の体部である。口縁部は失われ、外面は摩滅が著しいもののミガキ調整が認められる。

遺構外出土遺物 (Fig.15) 今回の調査における遺物包含層である黒灰色粘土層中からは、多数の弥生土器等が出土したが、破片化したものが多く、図示できたものは78～82の5点に留まった。

78は小型壺である。直立した口縁形態で、外面にはミガキ調整が施されている。79は複合口縁壺の口縁である。口縁端部の端面及び外面には交差した刺突文が施されている。80はく字碗形高坏の坏部である。端部はく字形となっており、外面には文様が認められず縦方向のミガキ調整が施されている。81はスカシ穴が認められる脚部の破片である。他に類例を見ない形態であるが、装飾高坏の脚部と推定される。82は輝緑岩製の磨製石斧である。刃部が欠損しているが、形状から乳棒状石斧と考えられる。

第3章 総括

今回の調査の結果、弥生時代後期の集落に関わる遺構と遺物を検出した。これまでの梶子遺跡の発掘調査で、弥生時代後期前半の山中式期に営まれた環濠集落が確認されているが、最後に今回の調査成果の位置づけと、今後の展望と課題を示して総括としたい。

1 発掘調査の成果

(1) 検出遺構

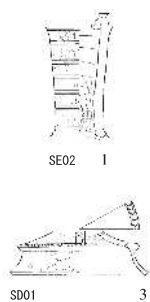
今回の梶子遺跡の発掘調査は、調査面積約 102 m²と小面積の調査ではあったが、調査区の全面において高い密度で弥生時代後期の遺構と遺物を検出した。遺構は溝や井戸、土坑のほか、建物の柱穴と考えられる小穴を多数検出した。

調査区内の遺構は、調査区中央を東西方向に掘削された幅 2.7 m の溝、SD01 を中心に並行または直交する小規模な溝が複数検出された。SD01 は規模が大きく出土遺物も豊富であり、集落の外周に掘削された環濠に匹敵する規模の溝であるが、既往の調査で確認している環濠とは位置や方向が異なる。南側に隣接する 7 次調査区においては、微高地内に複数の掘立柱建物で構成される建物群を検出し、微高地と低地との境界付近に掘削された幅溝を確認していることから、集落外周に掘削された環濠と捉えられている。SD01 は 7 次調査で確認した環濠と明確に異なる遺構であるが、今回の調査区の西側で実施した 15 次調査では、D 地区において東西方向に掘削された溝 SD1001 と SD1005 を検出しており、SD01 は掘削方向や規模からみて SD1005 と同一の溝の可能性が高い。梶子遺跡においては、近年の発掘調査により複数箇所環濠を検出し、集落の範囲と規模が明らかになりつつあるが、環濠とは掘削位置や埋土の特徴が異なる大型区画溝も検出されている。今回検出した SD01 は、集落外周部に掘削された環濠とは別に集落内を区画するものと考えられるが、その機能と掘削時期について、今後より詳細な検討が必要である。

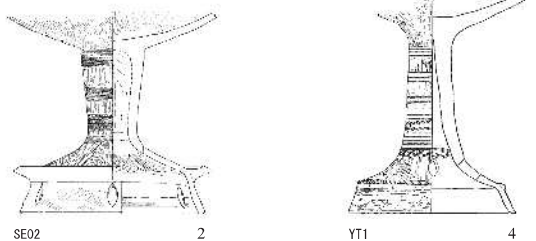
調査区内では 97 基に及ぶ多数の小穴を検出した。いずれも柱根は出土しなかったが、掘立柱建物の柱穴と考えられる。小穴は同一箇所重複して掘削されており、複数回の建替えが実施されたと推察される。調査範囲が狭いため明確に建物の配置を見出すことはできなかったが、7 次調査区において検出した掘立柱建物と同様の建物が今回の調査区周辺にも造営されていた可能性が高い。7 次調査区で検出された掘立柱建物群は、梁間と桁行が揃えられた規格的な建物で、高床式倉庫群と捉えられている。一方で堅穴建物は検出されなかった。梶子遺跡においては、居住用建物としての堅穴建物の検出例が極めて少なく、特徴の一つとなっている。近傍の調査区の調査成果から判断して、環濠集落の中心域に位置すると考えられるが、検出された建物遺構は掘立柱建物ないしその柱穴と思われる小穴に限られる。梶子遺跡のみならず、伊場遺跡群全体において堅穴建物の検出例に乏しい傾向があり、近年では、従前方形周溝墓として評価されていた遺構が、周溝を伴う周堤平地式建物として評価し直されている。

また、今回の調査区内においては、井戸を 2 基検出した。いずれも井戸側の伴わない素掘りの井戸である。このうち SE02 からは、装飾高坏とともに模倣品と思われる小型の土器が複数出土した。いずれも井戸の底面に近い位置から出土しており、実用品とは異なるこれらの土器を祭祀等に用いるため意図的に井戸内に投棄したと推察される。

梶子遺跡24次



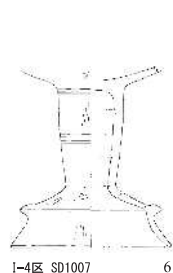
梶子遺跡5次



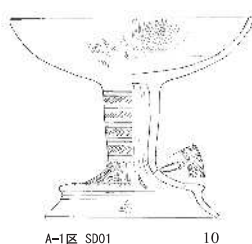
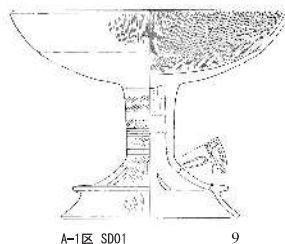
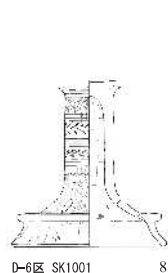
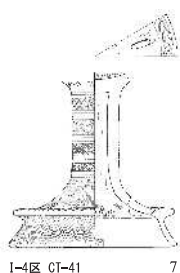
梶子遺跡10次



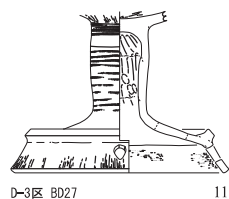
梶子遺跡15次



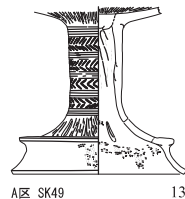
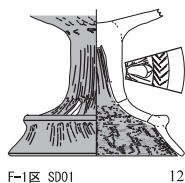
梶子遺跡16次



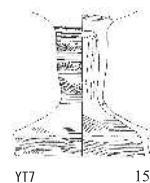
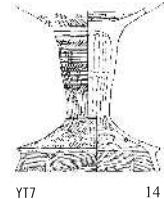
梶子遺跡18次



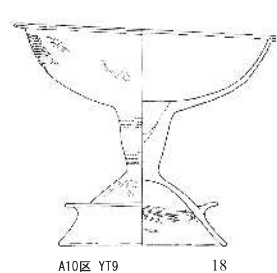
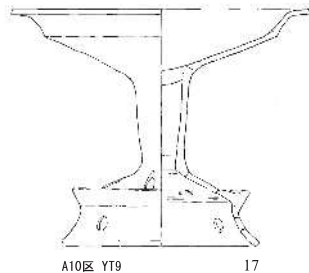
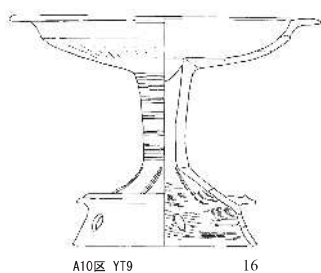
梶子遺跡19・20次



伊場遺跡4次



伊場遺跡6次



鳥居松遺跡5次

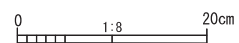
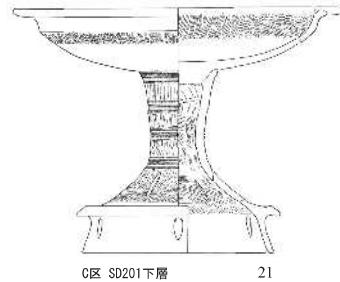
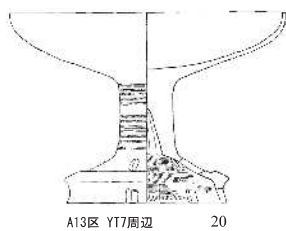
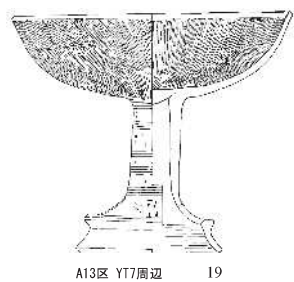


Fig.16 伊場遺跡群における装飾高杯の諸例

（２）出土遺物

出土遺物は、SD01 を中心に多数の弥生土器が出土した。出土した弥生土器は、壺や高坏、甕、鉢などが主体であるが、装飾高坏や小型土器など特殊な土器も含まれる。

壺は外反口縁壺、内湾口縁壺、折返口縁壺が認められた。遺存状態の悪い個体が多いため肩部の文様について確認できるものが少ないが、横線文と波状文が認められる。内湾口縁壺が含まれることから山中式期の中でも新相の要素が認められる。

高坏は外反坏部高坏ないし碗形坏部高坏が中心であり、坏部外面に横線文や波状文を施すなど山中式期の特徴をよく示している。脚部は円形のスカシ穴を有し、脚部形態の内湾化は認められない。

甕は、いずれも口縁端部に刺突文を有しており、無刺突のものは認められなかった。いずれも脚台部が失われているため、粘土帯の有無については確認ができなかった。

特徴的な遺物として装飾高坏が３点出土した。装飾高坏は伊場遺跡群で集中的に出土する高坏の一形態で、明確な屈曲を有する坏部や、坏部に向かって太くなる脚部、高い突帯やスカシ穴を有する脚台部が特徴である。その形態的な特徴から木製高坏を模倣したものと考えられている。今回出土したもののうち、SE02 から出土したものは、坏部が失われているものの、脚部から脚台部は良好に遺存している。伊場遺跡群から出土した装飾高坏には、坏部の形状や脚台部の突帯形状、スカシ穴の穿孔位置や形状などに複数の形態が存在するが、今回出土したものは伊場遺跡 6 次調査において環濠から出土したものと類似した形態である。

外来系土器については、壺や高坏に天竜川以東の菊川式ないしその影響を受けたものが認められた。明瞭に胎土等の特徴が異なるものは、天竜川以東の地域からの搬入品と考えられる。

今回出土した弥生土器は、いずれも後期前半の山中式期に位置づけられるが、その中でも新相の要素が認められ、既往の調査で認められた遺物の時期と大きな相違はないものとする。

２ 今後の展望と課題

今回の梶子遺跡の調査においては弥生時代後期の環濠集落に関する成果を得た。梶子遺跡では、近年の調査の進展により、環濠集落の範囲と規模が徐々に明らかになりつつある。遺跡内は微高地と低地が複雑に入り組んだ地形となっているが、調査成果の蓄積により微高地上に居住域を、低地に生産域（水田）を形成し、両者の境界に環濠を掘削するなど、地形と集落構造が結びついた構造であることを確認している。一方で長期に渡る発掘調査の過程で、環濠とは異なる大型区画溝の検出や、居住域における竪穴建物の検出例に乏しいなど、集落構造の把握において課題も残される。集落の全体像の解明には、さらなる調査成果の蓄積と検討が必要である。

これまでの発掘調査によって、梶子遺跡では隣接する伊場遺跡と同時期の弥生時代後期前半に、環濠集落が営まれたことが明らかとなっている。伊場遺跡では三重の環濠に囲まれた集落が検出されているが、梶子遺跡で同時期に造営された環濠集落とは規模や構造が異なることから、両者の関係と機能について検討すべき課題である。

また、弥生時代後期後半に至ると、伊場遺跡及び梶子遺跡の環濠集落は、急速に衰退する一方で、伊場遺跡群の東端に位置する鳥居松遺跡では、新たな集落が形成され、遺構と遺物が飛躍的に増加することが明らかになっている。伊場遺跡群における弥生時代後期の集落の変遷について、遺跡群全体のより緻密な分析が今後必要であると言える。

[参考文献]

- 太田好治 1990「旧国鉄浜松工場内遺跡の弥生時代の遺構について」『浜松市博物館報—Ⅱ—』浜松市博物館
- 加納俊介・石黒立人編 2002『弥生土器の様式と編年 東海編』
- 早野浩二 2018「三河・西遠江地域における弥生時代後期の土器編年」『東海考古学展望』東海考古学展望刊行会
- (財) 浜松市文化協会 1991『梶子遺跡Ⅷ』
- (財) 浜松市文化協会 1997『鳥居松遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 2000『山の神遺跡 5 次』
- (財) 浜松市文化協会 2005『梶子北 (三永)・中村遺跡—弥生時代編一』
- (財) 浜松市文化振興財団 2009a『鳥居松遺跡 5 次』
- (財) 浜松市文化振興財団 2009b『舞阪町天白遺跡』
- 浜松市遺跡調査会 1983『国鉄工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』
- 浜松市教育委員会 1982『伊場遺跡遺物編 3』伊場遺跡発掘調査報告書 第 5 冊
- 浜松市教育委員会 1997『伊場遺跡遺物編 7』伊場遺跡発掘調査報告書 第 9 冊
- 浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編 (文字資料・時代別総括)』伊場遺跡発掘調査報告書 第 12 冊
- 浜松市教育委員会 2013『梶子遺跡 14 次』
- 浜松市教育委員会 2014『梶子遺跡 15 次』
- 浜松市教育委員会 2015『梶子遺跡 16 次』
- 浜松市教育委員会 2016『梶子遺跡 17 次』
- 浜松市教育委員会 2017『梶子遺跡 18 次』
- 浜松市教育委員会 2019『梶子遺跡 19・20 次』
- 浜松市教育委員会 2020『梶子遺跡 23 次』

出土遺物観察表

凡 例

残存率：％表示、10％単位での切り上げ

反転：「反」は反転して図化したもの

大きさの単位は cm

回転体以外のおきさ表示 器径：長さ 器高：幅 口径：厚み

色調：『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

Fig. 番号	取上番号	遺構・層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
7	1	125・51	SD01	弥生土器	外反口縁壺	30			12.7	浅黄橙	刺突
7	2	55	SD01	弥生土器	外反口縁壺	20	反		15.2	浅黄橙	口縁波状文、棒状浮文数・方向不明
7	3	127	SD01	弥生土器	内湾口縁壺	30	反		16.4	浅黄橙	頸径8.6
7	4	99	SD01	弥生土器	内湾口縁壺	20			14.2	にぶい黄褐	
7	5	60・95	SD01	弥生土器	内湾口縁壺	40	反		14.0	浅黄橙	頸径7.6、波状文・横線文、黒斑
7	6	25	SD01	弥生土器	折返口縁壺	10	一部反		11.6	浅黄橙	頸径7.9
7	7	99	SD01	弥生土器	折返口縁壺	20	反		14.0	にぶい橙	口縁波状文
7	8	25・30	SD01	弥生土器	広口壺	10	反		21.0	浅黄橙	菊川式、口縁内面扇形文、口縁外面刺突、棒状浮文5×方向不明
7	9	25	SD01	弥生土器	広口壺	10	反		21.2	にぶい橙	菊川式、口縁内外面縄文、棒状浮文5×1
7	10	125	SD01	弥生土器	小型壺	30	反	13.0	9.8	にぶい黄橙	黒斑
7	11	50	SD01	弥生土器	直口壺	90	一部反	12.6	14.5 7.1	浅黄橙	底径3.1
7	12	125・51・99	SD01	弥生土器	壺	50	一部反	15.8		にぶい橙	底径5.5、黒斑
7	13	51	SD01	弥生土器	壺	90		13.6		浅黄橙	底径5.3、横線文
7	14	25	SD01	弥生土器	壺	60	一部反	19.2		浅黄橙	底径7.6
7	15	25	SD01	弥生土器	壺	50	反	23.4		灰白	底径7.0、黒斑
8	16	49・47	SD01	弥生土器	装飾小型直口鉢	20	反		11.6	浅黄橙	羽状文
8	17	53・19	SD01	弥生土器	〈字鉢	50	反	9.0 8.0	8.0	にぶい橙	底径3.2
8	18	49・45	SD01	弥生土器	〈字鉢	70		8.8 8.2	8.0	にぶい橙	頸径6.8、底径4.2、黒斑
8	19	51・50・99	SD01	弥生土器	〈字鉢	90		16.1 11.1	14.7	にぶい橙	底径5.5
8	20	99	SD01	弥生土器	〈字鉢	30	反	15.0	11.8	にぶい黄橙	
8	21	50・51	SD01	弥生土器	〈字鉢	20	反	16.4	15.8	浅黄橙	黒斑
8	22	98	SD01	弥生土器	〈字鉢	60		16.8 13.6	13.2	にぶい黄橙	底径6.6
8	23	49・50	SD01	弥生土器	〈字鉢	40	一部反	15.8	14.0	浅黄橙	穿孔2×?
8	24	53・54・55・19	SD01	弥生土器	〈字鉢	30	反	23.0	15.0	浅黄橙	
8	25	98・97・65・128	SD01	弥生土器	装飾〈字大型鉢	60		28.6 22.6	23.8	黄橙	頸径23.6、底径6.8、口縁刺突、黒斑
8	26	60・96・97	SD01	弥生土器	片口鉢	60			7.1 15.7	浅黄橙	底径4.7
8	27	26・24・30	SD01	弥生土器	脚付片口鉢	40	反		16.6	橙	接合部径6.0、底径12.8
8	28	125	SD01	弥生土器	ワイングラス形高坏	20	反	11.8	11.6	にぶい黄橙	
8	29	23	SD01	弥生土器	小型高坏	20				にぶい橙	底径10.0、スカシ1×3
8	30	47	SD01	弥生土器	小型高坏	30	反			浅黄橙	接合部径3.0、底径8.2、スカシ1×3
9	31	96	SD01	弥生土器	外反坏部高坏	60				にぶい橙	接合部径4.0、底径15.0、スカシ1×3
9	32	97・60・47・49	SD01	弥生土器	外反坏部高坏	40	反		27.8	にぶい橙	接合部径4.0、波状文
9	33	24・23	SD01	弥生土器	外反坏部高坏	30	反		21.8	浅黄橙	黒斑
9	34	98・97・99	SD01	弥生土器	外反坏部高坏	50			19.6	にぶい黄橙	
9	35	97・98・99	SD01	弥生土器	碗形坏部高坏	90		28.3 23.1	26.9	にぶい黄橙	接合部径4.7、底径16.7、スカシ1×3、赤彩?
9	36	128・26	SD01	弥生土器	高坏	30	反			橙	底径13.2、スカシ1×3、黒斑
9	37	23	SD01	弥生土器	高坏	30				浅黄橙	接合部径4.0、底径15.0、スカシ2×2
9	38	50	SD01	弥生土器	高坏	40				にぶい橙	底径15.9、スカシ1×3、黒斑
9	39	50・134	SD01	弥生土器	高坏	30	反			にぶい橙	刺突、スカシ1×3
9	40	19・54・52	SD01	弥生土器	高坏	20				浅黄橙	底径14.0
9	41	24	SD01	弥生土器	高坏	50		16.8 17.6		浅黄橙	接合部径5.2、底径11.0
9	42	50・48	SD01	弥生土器	高坏	20	反			にぶい橙	菊川式、底径10.8、口縁内面黒斑?
9	43	50・58	SD01	弥生土器	高坏	40	反		22.0	にぶい橙	菊川式、接合部径4.4、口縁刺突、黒斑
9	44	30・23・25・24	SD01	弥生土器	装飾高坏	30				橙	底径14.0、刺突、スカシ1×4
10	45	47	SD01	弥生土器	〈字甕	10	反	17.0	16.6	浅黄橙	刺突
10	46	50	SD01	弥生土器	〈字甕	20		15.2	14.0	にぶい黄橙	外面煤付着
10	47	51・29・30	SD01	弥生土器	〈字甕	30	反	16.3	16.0	にぶい橙	刺突
10	48	128	SD01	弥生土器	〈字甕	60	一部反	18.8	16.6	灰黄	刺突、黒斑
10	49	26・25	SD01	弥生土器	〈字甕	80		19.7	17.7	にぶい黄橙	刺突、煤付着
10	50	55・53・54	SD01	弥生土器	〈字甕	60		21.2	16.0	にぶい黄橙	口縁刺突、ヨコナデ、外面煤付着
10	51	53	SD01	弥生土器	〈字甕	70		22.1	17.7	にぶい黄橙	刺突
10	52	53	SD01	弥生土器	〈字甕	60	反	22.6	18.6	にぶい黄橙	刺突
10	53	51・49	SD01	弥生土器	〈字甕	30	一部反	23.1	20.0	にぶい橙	刺突
10	54	50	SD01	弥生土器	〈字甕	30	反	21.3	18.5	褐色	刺突、外面煤付着
10	55	99・98・48・47	SD01	弥生土器	〈字甕	50		22.7	21.1	にぶい黄橙	刺突
10	56	51・125	SD01	弥生土器	〈字甕	30	反	26.0	23.6	にぶい黄橙	刺突、外面煤付着
11	57	48・49・51・97・98・99	SD01	弥生土器	〈字大型甕	70			47.0	にぶい黄橙	刺突
11	58	29	SD01	石器	磨製石斧?			6.9 3.3	0.7	にぶい黄橙	24.0g、緑色片岩
12	59	27	SD02	弥生土器	小型壺	80		10.3 8.8	7.2	浅黄橙	頸径6.8、底径4.0
12	60	27・14	SD02	弥生土器	高坏	10				橙	底径13.8、刺突、スカシ1×3?
12	61	126・27	SD02	弥生土器	〈字碗形坏部高坏	30			27.2	黄橙	内面煤付着
12	62	28	SD03	弥生土器	碗形坏部高坏	50			15.3 17.6	浅黄橙	接合部径4.2、底径8.8
12	63	62	SD04	弥生土器	装飾小型直口鉢	60	一部反	9.8 8.7	11.2	にぶい橙	頸径7.8、底径4.3、羽状文
14	64	33	SE01	弥生土器	ワイングラス形高坏	70		10.4	9.1	にぶい黄橙	接合部径3.7、横線文、スカシ1×3、黒斑
14	65	33	SE01	弥生土器	〈字甕	10	反		18.4	にぶい黄橙	
14	66	33	SE01	弥生土器	農具(鍋?)			27.3 6.8	3.6		
14	67	61	SE02	弥生土器	小型壺	80		6.0		にぶい黄橙	底径4.0、内面赤彩
14	68	60	SE02	弥生土器	小型壺	50		8.0		浅黄橙	頸径3.8、底径3.6、黒斑
14	69	56・58	SE02	弥生土器	壺	70	一部反	18.9		浅黄橙	底径5.0、波状文・横線文、黒斑
14	70	61	SE02	弥生土器	小型直口鉢	70		6.8 6.5	6.4	橙	頸径5.4、底径3.2
14	71	59	SE02	弥生土器	小型直口鉢	100		9.5 9.7	8.3	にぶい橙	底径4.5、黒斑
14	72	58	SE02	弥生土器	高坏	50				灰白	接合部径3.8、底径9.9、スカシ1×3
14	73	56	SE02	弥生土器	高坏	40				にぶい黄橙	接合部径4.6、底径15.8、横線文6×3、スカシ1×3、黒斑
14	74	61	SE02	弥生土器	高坏	50				黄橙	接合部径3.5、底径13.0、横線文・刺突文、スカシ1×3、黒斑
14	75	57・60・102	SE02	弥生土器	装飾高坏	30	反			橙	横線文4×?
14	76	59・60	SE02	弥生土器	装飾高坏	50	反			橙	接合部径6.6、蹄状突帯20.8、底径18.8、横線状刺突6×3+3、スカシ6×2
15	77	79	SP37	弥生土器	小型壺	80		7.6		橙	底径3.4、底部板ナリ調整、黒斑
15	78	17	包含層	弥生土器	小型壺	40		7.6 7.9	5.4	淡黄	頸径5.5、底径4.2
15	79	17	包含層	弥生土器	複合口縁壺	10	反		15.2	にぶい黄橙	口縁格子文
15	80	15	包含層	弥生土器	〈字碗形高坏	40	反		25.4	にぶい黄橙	
15	81	14	包含層	弥生土器	装飾高坏	10	反			にぶい橙	底径19.0、スカシ方向不明
15	82	11	包含層	石器	磨製石斧	80		12.2 4.1	3.1		227.0g、輝緑岩

報 告 書 抄 録

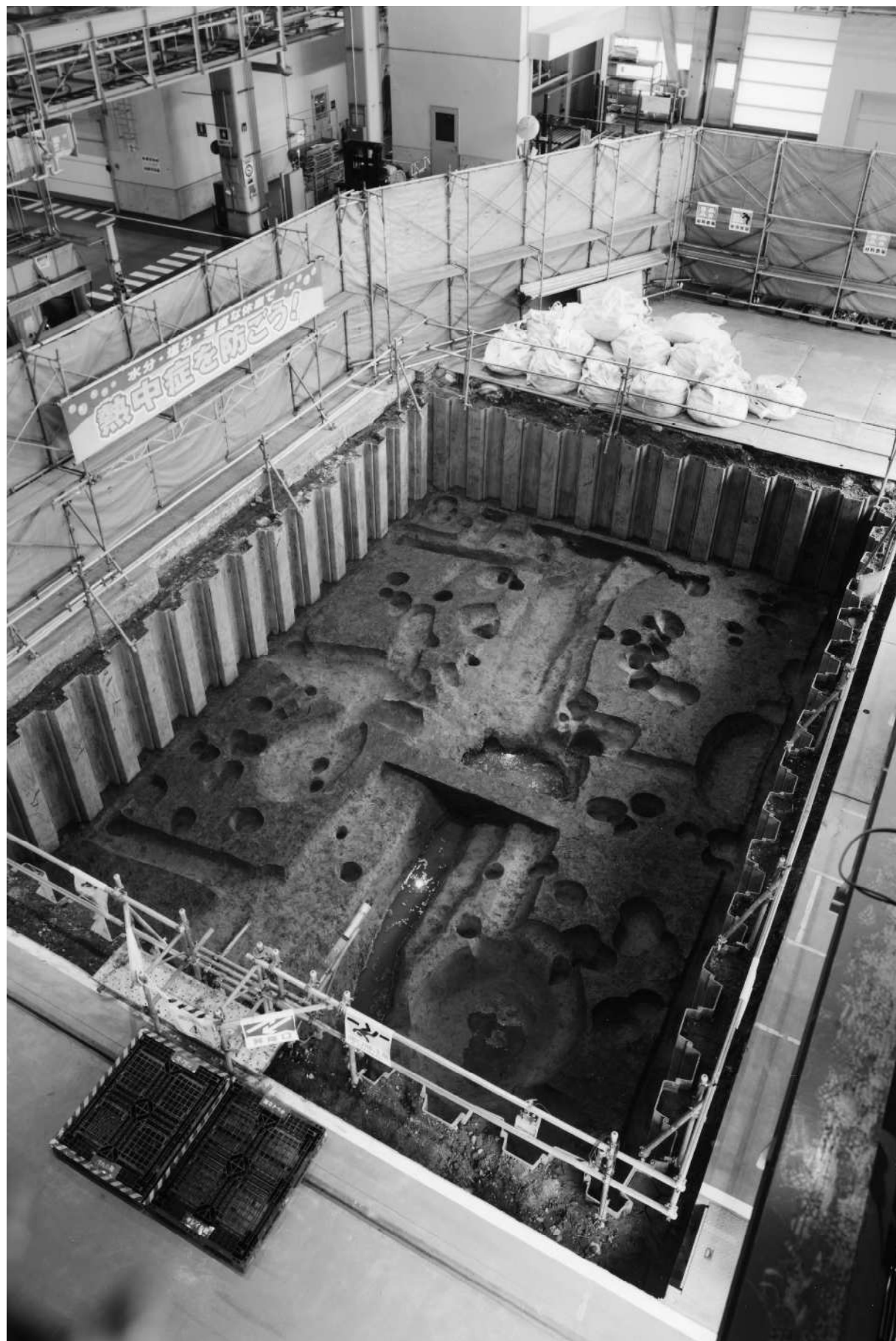
書名(ふりがな)		梶子遺跡 24 (かじこいせき 24)						
編著者名		井口智博						
編集発行機関		浜松市教育委員会 (浜松市市民部文化財課が補助執行) 浜松市市民部文化財課 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL(053)457-2466 FAX(050)3730-1391						
発行年月日		2021 年 3 月 12 日						
遺跡名 ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
梶子遺跡 かじこいせき	静岡県 浜松市 中区 南伊場町	22131	1-04-11	34 度 41 分 47 秒	137 度 42 分 39 秒	2021 年 5 月 12 日 ～ 5 月 27 日	102 m ²	新幹線台車旋 盤設置工事に 伴う埋蔵文化 財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
梶子遺跡	集落	弥生時代 奈良時代 平安時代		土坑 溝 井戸 小穴		弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 石器 木製品	弥生時代後期の環濠集落 を確認	
要約	梶子遺跡は、伊場遺跡群を構成する遺跡のひとつであり、遺跡群のほぼ中央に位置する。今回の調査地点では、主に弥生時代後期の土坑や溝、井戸、小穴等を検出した。遺構と遺物の密度は高く、過去の調査区との位置関係から弥生時代後期前半の環濠集落の中心域と考えられる。調査区中央を貫く溝は、過去の調査で検出された環濠とは掘削位置や方向が異なる。井戸内からは、装飾高坏や小型壺などの特殊な土器が出土し、祭祀に用いられたと考えられる。							

梶子遺跡 24

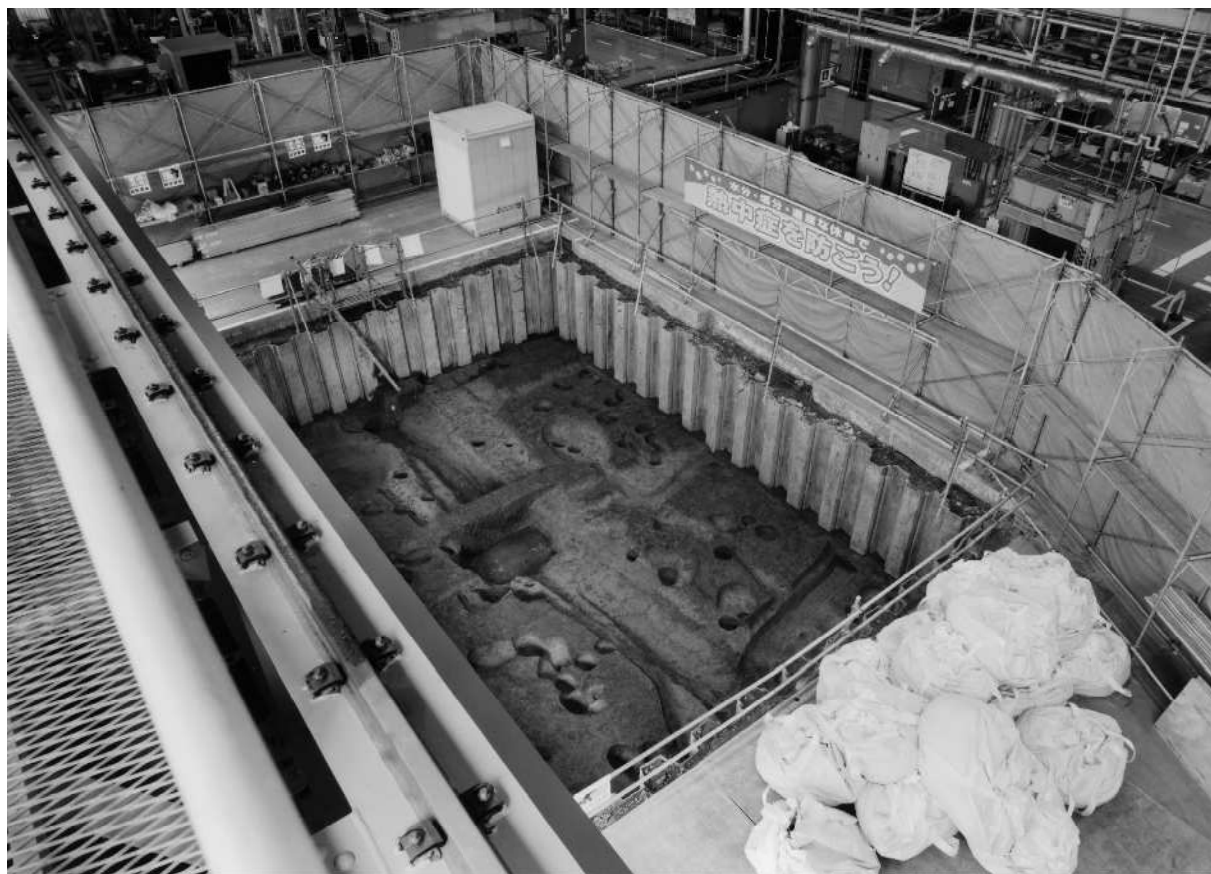
2021 年 3 月 12 日

発 行 浜松市教育委員会
編集 浜松市市民部文化財課
(浜松市教育委員会の補助執行機関)
〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2

印 刷 中部印刷株式会社



調査区全景（北東から）



1 調査区全景（北西から）



2 調査区全景（西から）



1 SE01 完掘状況（北西から）



2 SE02 完掘状況（北東から）



1 SD03 完掘状況（北から）



2 SD04・05・06・07 完掘状況（北東から）



3 調査区北西小穴完掘状況（北東から）



4 調査区南東小穴完掘状況（西から）



主要出土遺物







62



72



67



74



70



76

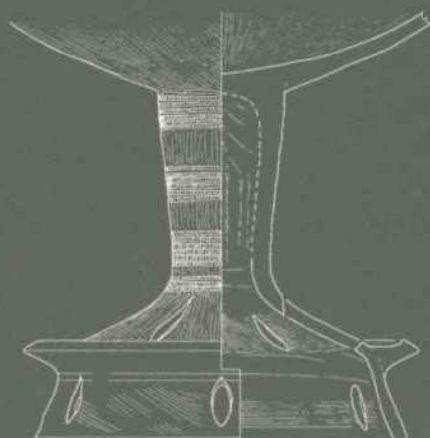


71

Kajiko Site 24

The 24th Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
in Western Shizuoka Prefecture, Japan



March, 2021

Hamamatsu Municipal Board of Education